



Title	現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立
Author(s)	清沢, 紫織; Kiyosawa, Shiori
Citation	スラヴ研究, 68, 1-43
Issue Date	2021-09-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84289
Type	departmental bulletin paper
File Information	68_01_Kiyosawa_Shiori.pdf



現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立

清 沢 紫 織

はじめに

2020年はベラルーシの歴史にとって大きな節目となった。26年の長きにわたり政権の座にあったアレクサンドル・ルカシェンコ（アリャクサンドル・ルカシェンカ）氏の大統領選挙での不正疑惑、そしてそれに抗議する市民への政権側の暴力的な弾圧は、多くのベラルーシ国民から反感を買いかつない規模で全国的な抗議活動が巻き起こった。抗議活動ではベラルーシ・ナショナリズムの伝統的なシンボルである白赤白旗とパホーニャ（пагоня）と呼ばれる馬上の騎士の紋章¹⁾が人々の団結のシンボルとして大きな役割を果たした一方で、言語に関しては反政権勢力や抗議活動の参加者の間ではロシア語が広く使用され、ベラルーシ語が人々の団結に特別大きな役割を果たしているとは言い難い状況にある。これは、現代ベラルーシにおいては全国民の8割以上を占めるベラルーシ人の大半が実質的にロシア語を主たる生活言語としていること²⁾、そうした中でベラルーシ語をナショナル・シンボルとして持ち出そうとするとベラルーシ語を「話す／話さない／（正しく）話せない」といった点が争点になり易く、得手すればベラルーシ語はベラルーシ人同士を分断する一種の踏み絵になってしまうリスクを孕んでいるからであろう。

勿論、ロシア語の使用が支配的なベラルーシ社会においても積極的にベラルーシ語を使用しようとする人々は少数ながら存在し、彼らにとってベラルーシ語は重要な団結のシンボルとしての意義をもっている。しかし、そうした数少ない意識的なベラルーシ語使用者層をも分断しかねない問題が現代ベラルーシ語には存在する。それがアルカージ・ジュラウスキー（Аркадзь Іосіфавіч Жураўскі）³⁾、アリャクサンドル・パドルジュヌイ（Аляксандр

1 白赤白旗と紋章パホーニャのルーツとナショナル・シンボルとしての歴史については、清沢紫織「ベラルーシのナショナル・シンボル：白赤白旗と紋章パホーニャの概要」(SRC 研究員の仕事の前線、2020年9月 [http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20200913.pdf] 2021年6月1日閲覧)を参照。

2 最新の2019年の国勢調査によれば、全ベラルーシ国民(9,413,446人)に占めるベラルーシ人の割合は84.9%(7,990,719人)である。言語状況については、家庭で日常的に使用する言語がベラルーシ語だと回答したベラルーシ人の割合はベラルーシ人全体の28.5%であるのに対し、ロシア語だと回答したベラルーシ人の割合は71.0%に上る (*Національний статистический комітет Республіки Беларусь. Общая численность населения, численность населения по возрасту и полу, состоянию в браке, уровню образования, национальностям, языку, источникам средств к существованию по Республике Беларусь. Минск, 2020. С. 31, 40. [https://belstat.gov.by/upload/iblock/471/471b4693ab545e3c40d206338ff4ec9e.pdf]*、2021年6月1日閲覧)。

3 *Жураўскі А.І. Праблемы норм беларускай літаратурнай мовы. Мінск, 1993; Жураўскі А.І. Дэструктыўныя ўхілы ў сучаснай беларускай мове // Беларуская мова ў другой палове*

Іосіфавіч Падлужны)⁽⁴⁾、シャルヘイ・ザプルツキー (Сяргей Мікалаевіч Запрудскі)⁽⁵⁾、イーハル・クリマウ (Ігар Паўлавіч Клімаў)⁽⁶⁾ といったベラルーシ人研究者が関心を寄せてきた現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立の問題である。現在、標準ベラルーシ語にはソ連時代(ただし1930年代以降)を通じて確立してきた公式な標準語規範(以下、公式規範)と1920年代にベラルーシ語使用者の間で広く普及したタラシケヴィツァ (тарашкевіца)⁽⁷⁾ と呼ばれる標準語規範(以下、タラシケヴィチ規範)の2つが存在しており、両標準語規範はベラルーシ社会において標準ベラルーシ語としての「真正さ」(authenticity)めぐる対立関係にある。

本稿では、まず言語政策論における実体計画 (Corpus planning)⁽⁸⁾ の観点から標準ベラルーシ語史を再検討し、標準ベラルーシ語の規範の分裂と対立がどのように生じてきたのかについて整理する。その上で、二つの標準語規範がそれぞれ支持者によってどのように「真正な」ベラルーシ語とみなされているのかという点から双方のメタ言語言説⁽⁹⁾ に着目し、その背後にある言語イデオロギー⁽¹⁰⁾ の実態を考察する。

стагоддзя: матэрыялы Міжнароднай навуковай канферэнцыі (Мінск, 22-24 кастрычніка 1997 г.). Мінск, 1998. С. 12-15.

- 4 Падлужны А.І. Праблемы варыянтнасці беларускай літаратурнай мовы // Беларуская мова ў другой палове XX стагоддзя: матэрыялы Міжнароднай навуковай канферэнцыі (Мінск, 22-24 кастрычніка 1997 г.). Мінск, 1998. С. 28-32.
- 5 Запрудскі С.М. Варыянтнасць у беларускай літаратурнай мове // IV летні семінар беларускай мовы, літаратуры і культуры (05-19 ліпеня 1999 г.). Мінск, 1999. С. 20-26; Запрудскі С.М. Праблемы нормы і варыянтнасці у беларускай літаратурнай мове // Міжнародная летняя школа беларусістыкі. Лекцыі (24 жніўня - 07 верасня 2015г.). Мінск, 2015. С. 19-23.
- 6 Клімаў І.П. Гісторыя складання двух стандартаў у беларускай літаратурнай мове // *Роднае слова*. 2004. № 6. С. 41-47.
- 7 その基礎となったのが、ベラルーシ人言語学者ブラニスラウ・タラシケヴィチが1918年に上梓した『学校のためのベラルーシ語文法』(Тарашкевіч Б.А. Беларуская граматыка для школ. Вільня, 1918.)であったことに因んでこのように呼ばれる。
- 8 実体計画とは、特定の言語の正書法、規範文法、専門語彙等の整備によって当該言語の形式 (form) を調整する領域であり、地位計画 (Status planning)、普及計画 (Acquisition planning) と並ぶ言語政策の三つの基礎領域の1つである (Robert L. Cooper, *Language Planning and Social Change* (New York: Cambridge University Press, 1989), pp. 31-34.)。
- 9 メタ言語言説とは言語に関する言及を指す (詳細は 2.2. にて述べる)。
- 10 言語イデオロギーとは、言語人類学者のマイケル・シルヴァスティンによると「知覚された構造や使用を合理化したり正当化したりするものとして使用者が表現する、言語に関する一連の信念」(Michael Siverstein, "Language Structure and Linguistic Ideology," in Paul R. Clyne, William F. Hanks & Carol L. Hofbauer, eds., *The Elements. A Parasession on Linguistic Units and Levels* (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1979), p. 193、日本語訳は木村護郎クリストフ「言語復興における言語イデオロギーに注目する」パトリック・ハインリッヒ、下地理則 (共編)『琉球諸語記録保存の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年、84頁による)と定義される。

1. 問題背景

1.1. 言語の実体計画とハウゲンによる言語の標準語化モデル

ある言語が近代社会の行政、教育、出版などの様々な領域での使用にたえる言語として発展する上での諸課題、すなわち言語政策における実体計画が取り組むべき諸問題を初めて本格的に論じ、その理論的枠組みを提示したのはアイナー・ハウゲン (Einar Haugen) である。ハウゲンは、方言ないし口語が標準語へと発展するプロセスについて 1) 規範の選別 (Selection of norm)、2) 規範の範例化 (Codification of norm)、3) 機能の造成 (Elaboration of function)、4) 共同体への受容 (Acceptance by the community)⁽¹¹⁾ という 4 段階からなるモデルを導いた⁽¹²⁾。ハウゲンは、さらにその後ハインツ・クロス (Heinz Kloss) が導入した言語政策領域における実体計画 (Corpus Planning) と地位計画 (Status Planning) の識別⁽¹³⁾ を自身の標準語の発展モデルに統合し、言語の標準語化が経るプロセスを最終的に以下のような形でまとめた (表 1 参照)。

表 1 ハウゲンによる言語の標準語化モデル⁽¹⁴⁾

	形式 Form [政策立案]	機能 Function [言語の洗練]
社会 Society [地位計画]	1. 選別 Selection [決定の過程] a) 問題の特定 identification of problems b) 規範の割り当て allocation of norms	3. 実施 Implementation [教育による普及] a) 手続きの修正 correction procedures b) 評価 evaluation
言語 Language [実体計画]	2. 範例化 Codification [標準化の過程] a) 文字化 graphization b) 文法規範化 grammatication c) 語彙化 lexication	4. 造成 Elaboration [機能の発展] a) 用語の近代化 terminological modernization b) 文体の発展 stylistic development

ここに示されているように、ハウゲンは自身の提示した標準語化プロセスの 4 つの段階のうち、特に「範例化」(codification) と「造成」(elaboration) を言語政策の実施における実体計画に関わるプロセスとして位置付け、更に両段階で達成されるべき具体的な課題を

11 表 1 に示すように、ハウゲンはこの段階を後に「機能の実施」(implementation of function) と修正した (Einar Haugen, “The Implementation of Corpus Planning: Theory and Practice,” in Co-barrubias and Fishman, eds., *Progress in Language Planning: International Perspectives* (Berlin: Mouton, 1983), p. 270)。

12 Einar Haugen “Dialect, Language, Nation,” *American Anthropologist* 68, no. 4 (1966), p. 933. なお selection, codification, elaboration の訳語はクルマス・フロリアン (山下公子訳) 『言語と国家』岩波書店、1987 年、83 頁によった。「造成」は、一般的に Heinz Kloss, “‘Abstand Languages’ and ‘Ausbau Languages’,” *Anthropological Linguistics* 9, no.7 (1967), pp. 29-41 における Ausbau の訳語として知られているが (例えば、田中克彦『ことばと国家』岩波新書、1981 年、162 頁)、ハウゲン自身が elaboration はクロスのいう Ausbau に相当すると述べていることから (Haugen, “Dialect, Language, Nation,” p. 931)、本稿では elaboration の訳語についても「造成」を用いることとする。

13 Heinz Kloss, *Research Possibilities on Group Bilingualism: A Report* (Quebec: International Center for Research on Bilingualism, 1969), p. 81.

14 Haugen, “The Implementation of Corpus Planning,” (前注 11 参照) p. 275.

チャールズ・ファーガソン (Charles Ferguson) の議論⁽¹⁵⁾ を踏まえて次のように整理している⁽¹⁶⁾。即ち、範例化における課題を①正書法の確立等によって書き言葉としての形式を定着させる「文字化」(graphization)、②正しい文法規則を導き出し文法書などに定式化する「文法規範化」(grammatication)、③適切な語彙を選別し辞書等に定着させる「語彙化」(lexication) の3つとし、造成における課題は①現代生活に不可欠な専門用語語彙を発展させる「用語の近代化」(terminological modernization)、②より柔軟で多様な言語表現を可能にする「文体の発展」(stylistic development) の2つとした。

1.2. 現代ベラルーシ語の標準語化とその問題点

現代ベラルーシ語は、ハウゲンが提示した言語の実体計画にかかるこれらの諸課題を20世紀初頭から本格化した標準語化の過程の中で達成してきた。特に1919年にベラルーシの領域にソヴィエト政権が樹立され、1920年にベラルーシ語がソヴィエト・ベラルーシ(BSSR⁽¹⁷⁾)における事実上の国家語に指定されると⁽¹⁸⁾ベラルーシ語の「文字化」、「文法規範化」、「語彙化」、「用語の近代化」は同国のベラルーシ文化研究所(1929年以降は、同研究所を改組した科学アカデミー)が中心的な担い手となって政策的に進められた。その成果として、ソ連時代から現在に至るまでに表2にあげるような正書法、文法書、辞書、専門用語辞典が編纂・刊行されている。

表2 現代ベラルーシ語の正書法・文法書・辞書・専門用語辞典⁽¹⁹⁾

正書法	(文字化の成果)
1934年	『ベラルーシ語正書法』ベラルーシ科学アカデミー言語学研究所
1959年	『ベラルーシ語の正書法及び句読法の規則』BSSR科学アカデミー言語学研究所
2008年	『ベラルーシ語の正書法及び句読法の規則』ベラルーシ共和国国立法情報センター
文法書	(文法規範化の成果)
1935-36年	『ベラルーシ語文法』(音声・正書法編、形態論編)、ベラルーシ科学アカデミー言語学研究所
1962-66年	『ベラルーシ語文法』(全2巻)、BSSR科学アカデミー言語学研究所
1985-86年	『ベラルーシ語文法』(全2巻)、BSSR科学アカデミー言語学研究所

15 Charles A. Ferguson, "Language Development," in Fishman, ed. *Language Problems of Developing Nations* (New York: Jhon Wiley&Sons. Inc.,1968), pp. 27-35.

16 Haugen, "The Implementation of Corpus Planning," (前注11参照) pp. 271-274.

17 Byelorussian Soviet Socialist Republic(ベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国)の略。ソヴィエト・ベラルーシは、1919-1922年は国名を Савецкая Сацыялістычная Рэспубліка Беларусі (略称СРБ)、1922年以降は Беларуская Савецкая Сацыялістычная Рэспубліка (略称БССР)としていたが、本稿では両者をまとめて、日本語では「ベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国」(あるいは単にソヴィエト・ベラルーシ)、略称をBSSRで統一する。

18 ただし、この時に事実上の国家語とされたのはベラルーシ語だけではなくロシア語、ポーランド語、イディッシュ語も合わせて4言語が国家語とされた。

19 Лукашанец А.А. Беларуская мова і акадэмічнае мовазнаўства ў пачатку XXI стагоддзя // Весці нацыянальнай акадэміі навук беларусі: Серыя гуманітарных навук, 2014. №1. С. 66-73.に基づき、重要だと思われる文献を適宜補って筆者が独自に作成した。なお、ベラルーシ文化研究所(Інстытут беларускай культуры)は同国科学アカデミーの前身組織である。

2007-09年	『簡略ベラルーシ語文法』（全2巻）、ベラルーシ国立科学アカデミー言語学研究所
辞書	（語彙化の成果）
ベラルーシ語・ロシア語辞典／ロシア語・ベラルーシ語辞典	
1925年	『ベラルーシ語・ロシア語辞典』ベラルーシ文化研究所（パイコウ、ニェクラシェヴィチ（編））
1928年	『ロシア語・ベラルーシ語辞典』ベラルーシ文化研究所（パイコウ、ニェクラシェヴィチ（編））
1937年	『ロシア語・ベラルーシ語辞典』BSSR 科学アカデミー文学・芸術・言語研究所（アレクサンドロヴィチ（編））
1953年	『ロシア語・ベラルーシ語辞典』BSSR 科学アカデミー言語学研究所（コーラス、クラビヴァ、フレブカ（編））
1962年	『ベラルーシ語・ロシア語辞典』BSSR 科学アカデミー言語学研究所（クラビヴァ（編））
詳解辞典	
1977-84年	『ベラルーシ語詳解辞典』（全5巻）BSSR 科学アカデミー言語学研究所
1996年	『標準ベラルーシ語詳解辞典』ベラルーシ科学アカデミー言語学研究所
2016年	『標準ベラルーシ語詳解辞典』ベラルーシ国立科学アカデミー言語学研究所
専門用語辞典（用語の近代化の成果）	
1922-30年	『ベラルーシ語学術用語集』（全24巻）ベラルーシ文化研究所

表中にない「文体の発展」のプロセスは、書き言葉としてのベラルーシ語の使用領域の拡大と共に進展していったと考えてよいだろう。特に、1920年にBSSR政府によりベラルーシ語が実質的な国家語と定められ、行政、教育、学術、文化等の社会の幅広い分野にその使用が導入されたことは、標準ベラルーシ語が各分野での使用実践に相応しい多様な文体を発展させていく重要な契機となった。

こうして、20世紀初めからソ連時代を通じて現代的な標準語として一連の発展プロセスを経てきたベラルーシ語は、1980年代の前半までには統一され安定した標準語規範を確立しベラルーシ社会の言語使用実践においてそれを定着させてきたとされてきた。これは、ソ連期にベラルーシの国内で実際に出版されてきた数々のベラルーシ語出版物をみれば一定の事実であることは疑いない²⁰⁾。一方で、現代ベラルーシ語を主要な研究対象とするベラルーシの言語学者達にとって、ベラルーシ語の標準語規範が統一性と安定性をもつことはいわば不可侵の前提条件であり、とりわけ重要視されてきたこともこうした「事実」を強調する大きな動機付けとなってきた²¹⁾。

しかし、1980年代後半からソ連全体がペレストロイカ政策の下におかれ、ベラルーシにおいても政治社会生活が自由化への転換点を迎えると、ベラルーシ語の標準語規範の統一性

20 統計データによれば、戦後1945～1990年にソヴィエト・ベラルーシの国内で刊行された87,887タイトルの書籍のうち、ベラルーシ語によるものは17,319点、ロシア語によるものは68,820点、その他の言語によるものは1,748点であった（*Нікалаеў М.В. [і інш.] Гісторыя беларускай кнігі. Т. 2. Кніжнасць новай Беларусі (XIX-XXIстст.). Мінск, 2011. С. 324-325*）。出版点数全体に占めるベラルーシ語書籍の割合は2割ほどで決して多数派ではなかったものの、毎年継続的に300～400点の書籍が刊行されたことは社会における標準ベラルーシ語の使用実践の場として一定の役割を果たしたと考えてよいだろう。

21 *Запрудскі С.М. Праблемы нормы і варыянтнасці*（前注5参照）。С. 20. なおザプルツキーは、標準語規範の安定や統一性を重視する価値観の背景要因として、ベラルーシ語の標準語規範をめぐる議論の参加者が実質的にロシア語話者でもあるという現状がベラルーシ語に比べてはるかに安定した標準語規範をもつロシア語と同様の状況を望ましいものとして志向させていることを指摘している（*Запрудскі. Варыянтнасць у беларускай.*（前注5参照）。С. 21）。

と安定性は揺らいでいった。ペレストロイカ期のベラルーシでは、ベラルーシ語復興の機運の高まりに伴ってソ連時代を通じて確立され公式なものとされてきた標準ベラルーシ語の規範が、言語純化主義的な志向をもつ一部の知識人層を中心にロシア化 (русификация) されたものとして非難されるようになったのである。これと相まって、より「真正な」ベラルーシ語規範として急速に支持を集めるようになったのが、1920年代にベラルーシ語使用者の間に広く普及した標準語規範であった。同規範は、ベラルーシ人言語学者ブラニスラウ・タラシケヴィチ (Браніслаў Адамавіч Тарашкевіч) ⁽²²⁾ によって1918年に上梓された『学校のためのベラルーシ語文法』を基礎に確立されたことからタラシケヴィチ規範 (тарашкевіца) と呼ばれ、1933年に実施された正書法改革までは唯一の標準ベラルーシ語規範として国内外のベラルーシ語使用者に支持され使用されてきた規範である。

現在、ソ連時代を通じて確立してきた標準ベラルーシ語規範 (公式規範) は、ベラルーシにおいて広く公式に認められたものとして行政や学校教育など国内の公的領域で使用されているが、タラシケヴィチ規範に則ったベラルーシ語使用もまた一部のベラルーシ語メディアや出版物、及び民族意識の強いベラルーシ人知識人や市民の間で熱心な支持者を獲得している。即ち、現在のベラルーシ社会では、標準ベラルーシ語に関して、ソ連時代を通じて確立してきた公式規範とペレストロイカ末期から急速に支持を集めるようになったタラシケヴィチ規範が並存し、両者は標準ベラルーシ語規範としての「真正さ」を巡って対立する関係にある。こうしたベラルーシ語をめぐる標準語規範の分裂状況は、1990年代頃からベラルーシ国内の研究者の間でベラルーシ語の標準語としての安定性を揺るがす要因として問題視されるようになったが ⁽²³⁾、今日に至るまで両規範の支持者が納得する形での問題解決には至っていない。

2. 先行研究、研究課題、研究方法

2.1. 先行研究の検討

現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立は、現代ベラルーシの言語問題を社会言語学的な観点から論じた様々な先行研究において頻繁に言及される問題である ⁽²⁴⁾。しかし、それらの多くは概して情報が断片的であり、現代ベラルーシ語がどのようにして標準語化のプロ

22 20世紀初頭を代表するベラルーシ人言語学者、社会活動家。標準ベラルーシ語規範の確立に貢献した第一人者として、ベラルーシ語史において位置づけられている。タラシケヴィチの詳しい来歴については、*Германовіч І. К. Тарашкевіч Браніслаў Адамавіч // Беларуская мова: энцыклапедыя / Пад рэд. Б. І. Сачанка і інш. Мінск: Беларуская энцыклапедыя, 1994. С. 558-559*; 早坂眞理『ベラルーシ：境界領域の歴史学』彩流社、2013年、297-307頁を参照。

23 標準語規範の不安定化に特に強い危機感を表明したのは、年長のベラルーシ人言語学者たちであった (*Запрудскі. Варыянтнасць у беларускай* (前注5参照)。С. 21)。

24 例えば Grigory Ioffe, “Understand Belarus: Questions of Language,” *Europe-Asia Studies* 55. no. 7 (2003), pp.1009-1047; Tomasz Kamusella, *The Politics of Language and Nationalism in Modern Central Europe* (London: Palgrave Macmillan, 2008) pp. 176-179; *Мечковская Н.Б. Почему в постсоветской Беларуси все меньше говорят на белорусском языке // Неприкосновенный запас. 2011. № 6 [080]. С. 207-224* など。

セスを経てきたのか、その過程で標準語規範の分裂と対立がいかんして生じてきたのかといった点は十分に整理・検討されていない。現代ベラルーシ語の標準語規範の成立過程をめぐる問題は、ベラルーシ国内でも作家やジャーナリストといったベラルーシ語を使用するインテリ層の間で特に高い関心が示される問題であるが、この問題に言語の専門家としての立場から長年関心を寄せ詳細な研究を行ってきたのは、特にベラルーシ語の標準語史を専門とするベラルーシ国内の言語学者たちである。

90年代前半に科学アカデミー言語学研究所の所長を務めたアルカージ・ジュラウスキーによる1993年の著書『標準ベラルーシ語規範の諸問題』(Праблемы норм беларускай літаратурнай мовы)⁽²⁵⁾は、現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立の問題を本格的に論じた最初の研究著作と位置づけられる。2つの標準語規範をめぐる問題を通時的な事実把握とともに詳細に検討した著作であるが、標準語規範の統一と安定性をとりわけ重要視する保守的な立場からタラシケヴィチ規範の現代での使用について一貫して批判的な論調をとるというもので、これは事実上当時の科学アカデミーの立場を代弁する研究書といってよいだろう。これに対して、2004年に発表されたイーハル・クリマウによる論文「標準ベラルーシ語における2つの規格の成立史」(Гісторыя складвання двух стандартаў у беларускай літаратурнай мове)⁽²⁶⁾は、1つの言語の標準語規範が統一されず複数存在することは必ずしも特殊なことではないという寛容な立場からタラシケヴィチ規範の存在意義とその支持派の主張を擁護しつつ論じたもので、先のジュラウスキーの研究とは異なる角度から2つの標準語規範をめぐる問題にアプローチしている重要な研究である。さらに近年では、2015年に科学アカデミーから出版された研究書『現代ベラルーシ語規範のダイナミズム』(Дынаміка літаратурнай нормы сучаснай беларускай мовы)においてヴァリヤンツィーナ・ルサーク(Валянціна Паўлаўна Русак)による論考「歴史文化的観点からみた標準ベラルーシ語規範の形成」(Станаўленне норм беларускай літаратурнай мовы ў гісторыка-культурным аспекце)⁽²⁷⁾が発表され、2つの標準語規範をめぐる問題が再び検討されている。ルサークの立場はジュラウスキー同様に標準語規範の統一と安定性を絶対視する保守的なものだが、この論文は先の2つの先行研究では捉え切れていない同問題をめぐる2000年代の状況を知るうえで大いに参考になる。これら3つの先行研究は、現代ベラルーシ語がその標準語化の過程で標準語規範の分裂と対立をどのように生じてきたのかという問題の全容を把握し、標準語史にかかわる史実を整理する上で貴重な資料であるともいえる。

ただし、これらいずれの先行研究についても、現代ベラルーシ語の標準語規範の成立過程については、先に概観してきたような実体計画の論点からの問題の体系的な検討は不十分であり、言語政策との関連から言及されるのはほとんどがベラルーシ語の公的地位の扱いに関する地位計画(Status planning)の問題、ないし教育分野でのベラルーシ語の普及実態に関する普及計画(Acquisition planning)に関わる問題に留まっている。実体計画における論点

25 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照)。

26 Клімаў. Гісторыя складвання двух стандартаў (前注6参照)。

27 Русак В.П. Станаўленне норм беларускай літаратурнай мовы ў гісторыка-культурным аспекце // Дынаміка літаратурнай нормы сучаснай беларускай мовы / Н.П. Еўсіевіч і інш. Мінск, 2015. С. 6-56.

を踏まえた記述という点では、ソ連期に書かれた標準ベラルーシ語史に関する代表的著作である I. Крамко, А. Юрэвіч, А. Яновіч⁽²⁸⁾ や Л. Шакун⁽²⁹⁾ 及び、ベラルーシの独立後に書かれた А. Жураўскі, М. Прыгодзіч⁽³⁰⁾ や М. Прыгодзіч⁽³¹⁾ などが比較的参考になる。しかし、いづれにおいても標準ベラルーシ語の発展過程を公式規範の変化や発展にのみ着目した単線的なものとして描いておりタラシケヴィチ規範はその存在について言及がみられない。

また、現代ベラルーシ語の標準語規範の成立過程について公式規範とタラシケヴィチ規範の両方を包括した体系的検討が不十分である現状は、それぞれの規範の支持者たちが各々の「同志」内で共有している標準語規範の「真正さ」に対する価値判断や評価の実態についても把握が不十分なままであるという問題も内包している。両者（公式規範の支持者とタラシケヴィチ規範の支持者）がいかにしてそれぞれの支持する標準語規範を「真正な」ものとして評価しもう一方の規範を「望ましくない」ものとして批判しているのかという双方の言語イデオロギーの実態を明らかにすることは、現代ベラルーシ語の標準語規範の成立過程がいかなる歴史的・社会的背景と実際の言語使用とを連関させながら進行的のかを把握する上で非常に重要である。

2.2. 本論文の研究課題と研究方法

以上の点を踏まえ、本論文では、言語政策論における実体計画 (Corpus planning) の観点から現代ベラルーシ語の標準語史を再検討し、標準ベラルーシ語の規範の分裂と対立がどのように生じてきたのか及び現在 2 つの標準語規範がそれぞれいかなる言語イデオロギーの下に「真正な」規範とみなされているのかを明らかにすることを目的とする。

現代ベラルーシ語の標準語化プロセスの考察にあたっては、ハウゲンの標準語化モデルを念頭に言語の実体計画の観点から標準ベラルーシ語史の再検討を行う。標準ベラルーシ語史は、伝統的に 15～17 世紀の古ベラルーシ語期と 19 世紀以降の新ベラルーシ語期の 2 つの時期に大きく分けて論じられる。本稿が扱うのは、このうち 19 世紀以降の新ベラルーシ語期の標準語史に相当する。アルカージ・ジュラウスキーが指摘するように、新ベラルーシ語期の標準ベラルーシ語は古ベラルーシ語期の書き言葉の伝統とは一旦断絶した上で新たに民衆の口語を基礎に発展してきた点を大きな特徴としている⁽³²⁾。そのため、書き言葉をもたない口語をその出発点と想定するハウゲンの標準語の発展モデルは現代ベラルーシ語の標準語化の過程を整理する上で有用であると考えられる。

なお、標準語史というものを考えるとき、どのような観点から時代区分を行うのが適切かという問題は、それ自体が 1 つの議論のテーマであろう。I. Крамко, А. Юрэвіч, А.

28 Крамко І.І., Юрэвіч А.К., Яновіч А.І. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы. Т. 2. Мінск, 1968.

29 Шакун Л.М. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы. Мінск, 1984.

30 Жураўскі А.І., Прыгодзіч М.Р. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 147-156.

31 Прыгодзіч М.Р. Гісторыя беларускага мовазнаўства // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 141-46.

32 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注 3 参照). С. 3-4.

Яновіч⁽³³⁾ や Л. Шахун⁽³⁴⁾ といったソ連時代の標準ベラルーシ語史においては、19 世紀以降の新ベラルーシ語期を、1917 年の十月革命を一つの区切りとして「十月革命前」と「十月革命後」の 2 段階から論じるという伝統があった。これは明らかに十月革命の意義を強調しようとするソヴィエト史観を前提とした政治的なもので、現代ベラルーシ語の標準語化の過程を正確に捉える上で適切なものとは言い難い。しかし Жураўскі, Прыгодзіч (前注 30 参照) や Прыгодзіч (前注 31 参照) といった独立後間も無くして書かれた標準ベラルーシ語史の著作においてもこの伝統は踏襲されている。

そこで、現代ベラルーシ語の標準語化がどのように進展し、その過程でいかにして標準語規範の分裂と対立が生じたかを言語政策的な観点、特に実体計画の観点から整理していくために、本稿では 19 世紀以降の新ベラルーシ語期について、標準語規範が対立関係を深めていった 2000 年代中頃までの現代ベラルーシ語の標準語化プロセスを次の 4 つの段階に分けて論じることを試みたい。

1) 個人的・他律的發展の段階 (19 世紀～ 1920 年頃)

作家や社会活動家などの個々人の執筆活動やロシア帝国科学アカデミー主導のロシア語諸方言の研究の中でのベラルーシ方言研究を中心に、ベラルーシ語が書き言葉として確立していく基礎を築いた段階

2) 政策的發展の段階 (1920 年頃～ 1930 年頃)

ソヴィエト政権下で、ベラルーシ語の標準語化が国家主導で政策的に進められた段階

3) 分裂的發展の段階 (1930 年頃～ 1980 年代前半)

正書法改革を機に、ベラルーシ語の標準語規範の分裂が生じそれぞれが発展した段階

4) 競合的發展の段階 (1980 年代後半～ 2010 年頃)

ベラルーシ国内で公式規範とタラシケヴィチ規範の競合関係が生じた段階

言語イデオロギーの実態については、ナーシャ・ニヴァ紙 (Наша Ніва)⁽³⁵⁾ というベラルーシ語新聞におけるタラシケヴィチ規範に則ったベラルーシ語の使用の是非をめぐる、1998 年に起こされた民事訴訟を事例とし、関連する新聞報道記事や同訴訟に関わった主要人物の著書を分析資料としてそれぞれの規範の支持者が展開しているメタ言語言説を考察する。

言語復興の問題との関連から言語イデオロギーに早くから注目してきた木村護郎クリストフは言語イデオロギーの分析の鍵となるメタ言語言説について「自覚的に言語を主題にした言説から、言語を主題にしていない場合の言語に関する言明、さらには直接に言語に言及なくとも言語に関連する事柄についてなされる表明まで含まれる」としている⁽³⁶⁾。すなわち、メタ言語言説とみなしうる言及・言明は言語への言及の在り方だけに着目しても、自覚的 (意識的) なもの、無自覚的 (無意識的) なもの、直接的 (明示的) なもの、間接的 (暗示的)

33 Крамко., Юрэвіч., Яновіч. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы (前注 28 参照)。

34 Шахун. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы (前注 29 参照)。

35 ナーシャ・ニヴァ紙は、20 世紀初頭に出版されていた同名のベラルーシ語新聞の復刊として 1991 年より発行されるようになった独立系 (非政府系) 新聞である (詳細は 4.1 にて述べる)。

36 木村「言語復興における言語イデオロギーに注目する」(前注 10 参照) 86 頁。

なものと同様なタイプ分けが可能である。このほかにも、言語事実そのものをどう扱うかという点も重要な観点であろう。言語事実に「正しい／正しくない」「好ましい／好ましくない」といった主観的な価値判断を行うメタ言語言説は言語イデオロギーの分析にとってとりわけ明確な手掛かりとなるが、言語事実をより客観的に観察・記述しようとする言語学者による研究の営みもまたイデオロギー的に中立とは言い切れないメタ言語言説としての側面を持っている⁽³⁷⁾。

ベラルーシ語の標準語規範をめぐるメタ言語言説にも様々なタイプがみられるが、本論文では、標準語規範としての「真正さ」という言語イデオロギーを考察するための手掛かりとして特に明確なもの、すなわち、自覚的にベラルーシ語の標準語規範を主題としたうえで2つの言語規範の「真正さ」や「望ましさ」（あるいはその逆）といった主観的な価値判断を直接的に言明しているメタ言語言説に注目する。1998年に起きたナーシャ・ニヴァ紙におけるタラシケヴィチ規範の使用をめぐる訴訟問題は、公式規範の支持者とタラシケヴィチ規範の支持者の対立の立場がとりわけ顕著に強調された出来事であり、同問題をめぐって現れたメタ言語言説は、両者の依拠する言語イデオロギーを分析する上で特に有力な資料であるといえる。

また、言語イデオロギーを考察する上で注目するメタ言語言説の集め方についてもいくつかの手段が考えられるだろう。木村は言語イデオロギーを構成するメタ言語言説は言語社会に加わっている人々全体や一定の範囲においてある程度継続的に共有される傾向があるということを描いた上で、言語イデオロギーを考察する手がかりとして「インターネットや新聞雑誌、書籍などによって一定の範囲で流通する諸言説」に注目することの意義を強調している⁽³⁸⁾。本論文ではこの指摘を踏まえて、今回分析するメタ言語言説については、新聞記事および書籍（研究書）というベラルーシ社会内に流通する形で発信されたものの中にみられるものに注目していく。

3. 現代ベラルーシ語の標準語化プロセス

3.1. 個人的・他律的發展の段階（19世紀～1920年頃）⁽³⁹⁾

現代ベラルーシ語が書き言葉として發展を始めた19世紀初めのベラルーシ地域は、18世紀末のポーランド分割によりその全域が帝政ロシア領に組み込まれて間もなく、言語に関しては新たな政治体制によって後盾を得たロシア語と長年のポーランド支配により貴族層や

37 木村「言語復興における言語イデオロギーに注目する」（前注10参照）96頁。

38 木村「言語復興における言語イデオロギーに注目する」（前注10参照）84-85、87-88頁。なお、効率よくデータを集めるためにしばしば用いられるアンケートやインタビューについて、木村は、研究者自身がその生産をうながす言説のみに頼ることの危うさを指摘したうえで「研究者の観点から問いや回答選択肢を設定することは、研究者の予断にもとづいた新たな言説のあり方を作り出しかねない」として警鐘を慣らしている（木村「言語復興における言語イデオロギーに注目する」88頁）。

39 特に出典が明示されない限り、本節の内容は *Жураўскі, Прыгодзіч. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы*（前注30参照）。С. 150-151, 153-154; *Прыгодзіч. Гісторыя беларускага мовазнаўства*（前注31参照）。С. 142-143. に基づく。

領主層の間に定着していたポーランド語の2言語が国内の行政や文化領域を担う状況にあった。一方、ベラルーシ語は農民層や下級シュラフタ層などの間で専ら話し言葉として用いられるに留まっていた。即ち、当時のベラルーシ社会は、ダイグロシアの概念でいうところとの高位変種としての機能まで担っていたのはロシア語とポーランド語の2言語であり、ベラルーシ語（より正確にはベラルーシ語と将来的に呼びうる言語的特徴を備えた口語）は低位変種としてのみ機能する状況にあったといえる。

こうした中で、現代ベラルーシ語に書き言葉としての発展の端緒を開いたのが、ヤン・チャチョト (Ян Чачот)、ヤン・バルシュチュエウスキ (Ян Баршчэўскі)、アリャクサンドル・ルイピンスキ (Аляксандр Рыпінскі) といったベラルーシ地域を出身とする作家たちである。彼らは執筆活動に際しては主にポーランド語を用いたが、母語であるベラルーシ地域の民衆の口語でも詩の創作を試み数々の作品を残した。彼ら自身は「ベラルーシ語によって執筆している」という意識はもっていなかったものの⁽⁴⁰⁾、それらの作品は実質的に（即ちベラルーシ語が個別言語として存在することを自明とする後の視点からみれば）ベラルーシ語によって書かれた文学作品とみなしうるものであり、専ら口語として用いられていたベラルーシ語はこうして文字に書き起こされるようになって「文字化」の第一歩を踏み出した。

19世紀も半ばを過ぎると、ベラルーシ語を明確に自立した個別言語と認識した上で、より洗練された文体の確立、すなわち実質的な「文体の発展」を目指して戯曲などの執筆を行ったヴィケンツィ・ドゥニン＝マルツィンケヴィチ (Вікенцій Дунін-Марцінкевіч) や数々の詩の創作と並行してベラルーシ民衆に向けて積極的にベラルーシ語の自立性を説きベラルーシ語の保護を強く訴えたフランツィシャク・バフシェヴィチ (Францішак Багушэвіч) といった作家の活躍により、ベラルーシ語による創作活動は次第に活発化していった。こうしたベラルーシ語による文芸活動の広がりにはベラルーシ語が書き言葉として発展する基盤を築いていったが、一方で、ベラルーシ語による自由な出版活動は帝政ロシアによる支配の下で政治的な制約を受けており、生み出された作品の多くは広く大衆に普及することができない状況におかれた。帝政ロシア政府は1830～1831年の第一次ポーランド蜂起以降、国内の文化・教育政策における脱ポーランド化を進めており、1859年にはロシア語出版物における「ポーランド文字」（即ち、ラテン文字）の使用禁止を定めた通達を出した。当時ポーランド語に倣い専らラテン文字で表記されていたベラルーシ語の文芸作品はこれに抵触するものとして扱われしばしば出版が差し止められたのである⁽⁴¹⁾。

作家たちによるベラルーシ語の書き言葉としての使用実践と並行して、19世紀にはベラルーシ語に対して言語学的な関心も注がれるようになっていった。ただし、当時ベラルーシ

40 バルシュチュエウスキやルイピンスキは自身の執筆言語をベラルーシ語ではなくポーランド語の方言であるとみなすに留まっていた。チャチョトはベラルーシ語を自立したスラヴ語であるとみなしていたが、言語名としてはクリヴィチ語 (крывіцкая мова) という名称を用いて呼んだ (*Шахун. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы* (前注 29 参照). С. 193, 197)。

41 *Крамко, Юрэвіч, Яновіч. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы* (前注 28 参照). С. 20. この1859年の通達は直接的にはウクライナ語に対して発布された内容であったが、事実上ベラルーシ語に対しても法的効力をもったとされている。実際にこの通達を根拠にドゥニン＝マルツィンケヴィチによる『パン・タデウシュ』（アダム・ミツケヴィチ原作）のベラルーシ語訳がラテン文字表記であったために出版が禁止された。

人は自立した民族として見なされておらず、ベラルーシ語もまた個別言語としての認知を得るには至っていなかった。この頃、定説として広く支持されていたのが「ベラルーシはロシア人の民族領域の一部であり、ベラルーシ語はロシア語の方言である」とする大ロシア説 (великаруская канцэпцыя) と「ベラルーシ人はポーランド人の一部であり、ベラルーシ語はポーランド語の方言である」とするポーランド説 (польская канцэпцыя) である⁽⁴²⁾。これゆえ、19世紀のベラルーシ語研究は両言語の方言研究としての性格を帯び、ベラルーシ語の言語的特徴は特にロシア語やポーランド語の地域方言を論ずる枠組みの中で記述された⁽⁴³⁾。

19世紀半ばには、方言研究の枠組みの中で発展したベラルーシ語研究の著作の中でも後のベラルーシ語の標準語化を支える貴重な資源となるものが現れた。特に、イズマイル・スレズネフスキー (Измаил Иванович Срезневский) を中心とするロシア語方言の辞書編纂プロジェクトの成果の一つとしてロシア帝国科学アカデミーより1870年に出版されたイヴァン・ナソヴィチ (Іван Іванавіч Насовіч) による『ベラルーシ方言辞典』(Словарь белорусского наречия)⁽⁴⁴⁾は、20世紀以降に本格化したベラルーシ語辞書の編纂の際には重要な基礎文献の1つとなり「語彙化」のプロセスに貢献した。19世紀半ばから20世紀初めにかけては、ナソヴィチのようにロシア帝国科学アカデミーのプロジェクトに関わって研究活動に従事した、あるいはモスクワやペテルブルクで高等教育を受けたベラルーシ人の民俗学者・言語学者を中心として、ベラルーシ諸地域の言語的特徴に関する記述的研究が盛んに行われた。

中でも、ヤウヒム・カールスキー (Яўхім Фёдаравіч Карскі)⁽⁴⁵⁾は、ベラルーシ地域の民衆の口語や民間伝承・民謡等の記述的研究並びに同地域に中世より残されてきた文献資料の研究に尽力して数多くの研究成果を残した。1903～1922年にかけて出版された『ベラルーシ人』(Белорусы, 全3巻)は、とりわけ代表的な研究著作として知られ、特に『ベラルーシ民族の言語』(Язык белорусского племени)と題された同書の第2巻(全3冊)⁽⁴⁶⁾はベラルーシ語に関する歴史言語学的研究と記述言語学的研究の成果にあてられている。カール

42 Кулеш Г.І. Канцэпцыя паходжання і этапы развіцця беларускай мовы // Міжнародная летняя школа беларусістыкі. Лекцыі (24 жніўня - 07 верасня 2015г.). Мінск, 2015. С. 9-10.

43 こうした研究の最初期のものとしてはコンスタンチン・カライドヴィチ (Константин Калайдович) による論文「ベラルーシ方言について」(Калайдович К.Ф. О белорусском наречии // Труды общества любителей российской словесности при императорском Московском университете. Ч. 1. Москва, 1822) やルカシュ・ゴウエンビオフスキ (Łukasz Gołębiowski) による『ポーランド民族：その習慣と民間信仰』(Łukasz Gołębiowski, *Lud polski: jego zwyczaje, zabobony*, (Warszawa: w drukarni A. Gałębiowskiego i spółki, 1830)) におけるベラルーシ人の言語的特徴に関する記述などがある。

44 Носович И.И. Словарь белорусского наречия. СПб., 1870.

45 カールスキーに関するここでの記述は特に明示されない限り Булахавіч М.Г. Карскі Яўхім Фёдаравіч // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 255-257 に基づく。

46 Карскі Е.Ф. Беларусы: Том II. Язык белорусского племени. Кн.1. Исторический очерк звуков белорусского наречия. Варшава, 1908; Кн.2. Исторический очерк словообразования и словоизменения в белорусском наречии. Варшава, 1911; Кн.3. Очерки синтаксиса белорусского наречия. Дополнения и поправки. Варшава, 1912.

スキーは、この『ベラルーシ人』を含む一連の研究により、ベラルーシ語の音韻構造、形態的特徴、統語構造、語彙的特徴などを体系的に記述し、ベラルーシ語が隣接するスラヴ諸語との密接な相互影響の下にありながらも独自の言語的特徴を発展させてきたことを示した。カールスキー自身は現代ベラルーシ語の標準語化にかかる問題にはさほど関心がなく⁽⁴⁷⁾、標準ベラルーシ語の社会への普及の可能性にも懐疑的な立場にあったとされているが⁽⁴⁸⁾、彼の研究成果を後にブラニスラウ・タラシケヴィチが『学校のためのベラルーシ語文法』の基礎としたとされており⁽⁴⁹⁾、実質的に現代ベラルーシ語の「文法規範化」に大きく貢献したと言えるだろう。

20世紀に入るとベラルーシ語は書き言葉として急速に社会へ普及していく新たな段階に入った。転機となったのが1905年11月に帝政ロシア政府によって発布された「出版の自由に関する法律」である。この法律を機に出版分野でのベラルーシ語の使用が公に認められ、翌1906年からサンクトペテルブルク及びヴィリニウスを拠点にベラルーシ語による書籍及び定期刊行物の出版が本格的に始まった⁽⁵⁰⁾。特に1906年11月にヴィリニウスで創刊されたベラルーシ語新聞『ナーシャ・ニヴァ紙』(Наша Ніва)は、20世紀初めに活躍した数々のベラルーシ人作家及び社会活動家の言論の場として重要な役割を果たし、第一次世界大戦の本格化する1915年8月までのおよそ9年間にわたって週刊新聞として刊行を続けた⁽⁵¹⁾。こうしてベラルーシ人知識人層によるベラルーシ語の使用実践の場が広がっていく中で、ベラルーシ語の正書法と文法規範は次第に自然発生的な形で一定の統合へと向かっていった。特に『ナーシャ・ニヴァ紙』において蓄積された人々のベラルーシ語使用の実践は、「文字化」のプロセスにとって重要な正書法の洗練に大きく貢献した⁽⁵²⁾。

第一次世界大戦が始まると帝政ロシア軍はドイツ帝国軍との戦いで敗北を重ね、1915年の秋までにはロシア北西部の広大な領土がドイツ軍によって占領された。占領地のうちベラルーシ人の民族運動や言論活動の中心地であったヴィリニウスを含むベラルーシの西部地域はオーバー・オスト(Ober Ost)⁽⁵³⁾と呼ばれるドイツ帝国による軍事支配体制の下におかれた。

47 Запрудскі С.М. Беларускае мовазнаўства і развіццё беларускай літаратурнай мовы: 1920-1930 гады. Мінск, 2013. С. 104.

48 Шакун. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы (前注 29 参照). С. 257.

49 Шакун. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы (前注 29 参照). С. 257.

50 サンクトペテルブルクは、1906年5月にベラルーシ出版協会「我が窓辺にも日が差す」(Беларускае выдавецкае таварыства “Загляне сонца і ў наша аконца”)が設立され、第一次世界大戦でその活動が中止されるまでの約10年間ベラルーシ語による書籍出版の重要な拠点として機能した。一方、ヴィリニウスでは、ベラルーシ語新聞の『ナーシャ・ドーリャ紙』(Наша доля)及び『ナーシャ・ニヴァ紙』(Наша Ніва/ Naša Niwa)等の定期刊行物を中心に、ベラルーシ語による出版活動が始まった。

51 Усціновіч Г.К. Наша Ніва // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 384.

52 Клімаў. Гісторыя складвання двух стандартаў (前注 6 参照). С. 42. 一例を挙げると、現在ベラルーシ語の正書法における母音と子音の綴り方の原則となっている、母音字は音声的な実体を反映させて綴り子音字は形態的な実体に即して綴るというやり方は、20世紀初頭のベラルーシ語出版物で定着していった正書法の原則の1つである。

53 Ober Ost とは、Oberbefehlshaber Ost (東方軍最高司令官)による支配行政とその支配地を意味

オーバー・オスト地域の教育政策では、学校教育を通じてロシアの文化的影響から非ロシア人諸民族の土地を隔離し、ドイツ帝国に忠実な新しい世代を育成することが目指され⁽⁵⁴⁾、各民族の母語による教育や出版活動が奨励された⁽⁵⁵⁾。こうした中、占領下のヴィリニウスではベラルーシ語で教育を行うベラルーシ人学校の運営が始まり⁽⁵⁶⁾、それに伴ってベラルーシ語の学習教材についての需要が急速に高まって⁽⁵⁷⁾、ベラルーシ語の正書法解説書や文法書の編纂が試みられるようになった⁽⁵⁸⁾。こうした中で、1918年に出版されたのがブラニスラウ・タラシケヴィチによる『学校のためのベラルーシ語文法』(Беларуская граматыка для школ)である⁽⁵⁹⁾。

1892年にヴィリニウス近郊の農村に生まれたタラシケヴィチは、1911年にペテルブルク帝国大学歴史文献学部に進学、同大学のロシア語講座主任教授を務めていたアレクセイ・シャフマトフ(Алексей Александрович Шахматов)を指導教官としながら学んだ。ベラルーシ語の文法書執筆に取り掛かったのは、ペテルブルク帝国大学在学中の1913年、ヴィリニウスのベラルーシ出版協会を通じて作家ヤンカ・クパーラ(Янка Купала)から依頼を受けたことがきっかけであった。タラシケヴィチは、1916年に大学を卒業した後も、同大学のギリシャ語・ラテン語の講師を務めながらシャフマトフや当時ロシア帝国科学アカデミーで研究を行っていたカールスキーの協力を受けてベラルーシ語文法書の執筆を続け、1918年に帰郷したヴィリニウスにて『学校のためのベラルーシ語文法』を上梓した。同書はその表題の通り、学校教育での使用を念頭に書かれたものであったが、そこで示されたベラルーシ語の統一的な正書法と文法規範は、教育分野のみならず作家や民族運動の活動家らの執筆活動、

する(谷喬夫「ヒトラーのドイツ東方支配」『法政理論』第44巻2・3号、2012年、26-80頁)。

- 54 Ляхоўскі В.В. Школьная адукацыя ў Беларусі падчас нямецкай акупацыі (1915-1918гг.). Вільня, 2010. С. 77, 94.
- 55 Hermann Bieder, “Weißrussland unter deutscher Militärverwaltung im Ersten Weltkrieg (Sprach- und Kulturpolitik im Gebiet „Ober Ost“ in den Jahren 1915-1918),” *Studia Białorusinistyczne*, Tom 9, (2015), S. 221, 223-225, 229.
- 56 ベラルーシ語教育を行うベラルーシ人学校は、1915年にドイツ帝国の占領政策の一環でヴィリニウスにて初めて合法的なものとして活動を開始し以降急速にその数を増やしていった(Ляхоўскі. Школьная адукацыя ў Беларусі (前注 54 参照). С. 119)。
- 57 Ляхоўскі. Школьная адукацыя ў Беларусі (前注 54 参照). С. 119.
- 58 代表的な著書としては、Balasłaŭ Račobka *Hramatyka bielaruskaj mowy* (Wilnia: Durkarnia “НО-MAN”, 1918); Anton Łuckewiç *Jak prawilna pišać pa bielarusku* (Wilnia: Durkarnia M. Kuchty, 1917); Anton Łuckewiç, Jan Stankewiç *Bielaruski prawapis* (Wilnia: Durkarnia M. Kuchty, 1918); Rudolf Abiht *Prosty sposab stacca ŭ karotkim čase hramatnym* (Breslaŭ, 1918) など。
- 59 以下、タラシケヴィチ及び『学校のためのベラルーシ語文法』に関する記述は Германовіч. Тарашкевіч Браніслаў Адамавіч (前注 22 参照) С. 558., Шакун Л.М. «Беларуская граматыка для школ» Б.А. Тарашкевіча / Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 81. に基づく。また、В. Тарашкевічの『学校のためのベラルーシ語文法』の現代ベラルーシ語の標準語史上の意義と役割については、以下も参照。Киёсава С. Переосмысление роли «Белорусской грамматики для школ» Б. Тарашкевича в процессе становления белорусского литературного языка. // Грамматика в обществе, общество в грамматике. Исследования по нормативной грамматике славянских языков. / под ред. Номати М., Киёсава С. Москва: ЯСК, 2021. С. 61-97.

出版分野においても広く支持されて急速に普及・定着することとなった。この背景には、同書はキリル文字表記版とラテン文字表記版の2つの版で出版されたため当時使用文字の問題で二分されていた識字層のベラルーシ人全員にとって受け入れやすいものであったこと⁽⁶⁰⁾、また同書が狭い読者層を対象とした専門書ではなく非識字層も含むより多くのベラルーシ人が利用可能な学校教科書という形式で刊行されたことなどがある⁽⁶¹⁾。また、ベラルーシ語の母語話者でありながらシャフマトフやカールスキーといった高名なスラヴ学者から言語学の専門教育を受けた経歴を持ち合わせていたタラシケヴィチは当時のベラルーシ人知識人層の中でも稀有な存在であり、彼自身に対する知識人層からの信頼性の高さもまた彼の文法書が大きな支持を得る要因となった。

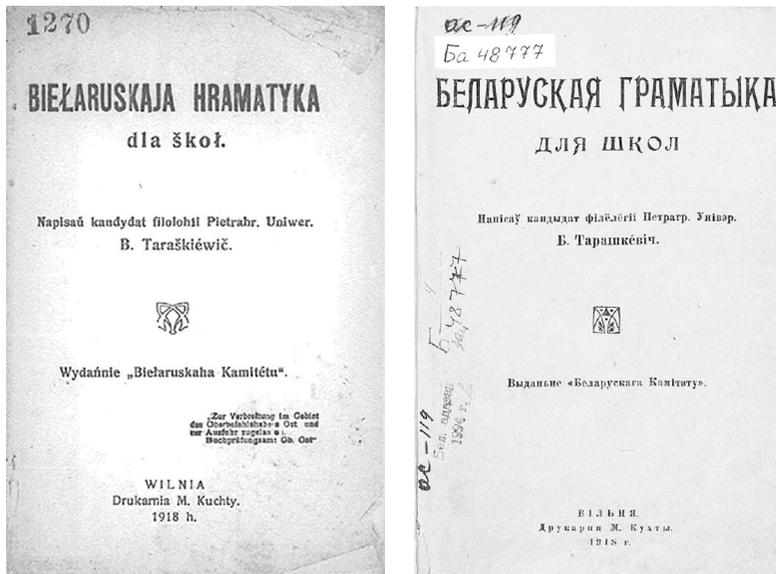


図1 ブラニスラウ・タラシケヴィチによる『学校のためのベラルーシ語文法』(1918年)の表紙

- 60 当時のベラルーシ人は、ベラルーシ語の表記に関してキリル文字表記を好む正教徒とラテン文字表記を好むカトリック教徒に二分された状況にあった。1897年のロシア帝国国勢調査によれば、ベラルーシ地域5県（グロドノ県、ヴィリノ県、ミンスク県、ヴィテプスク県、モギリョフ県）に住むベラルーシ人のうち正教徒の占める割合は81.1%、カトリック教徒の占める割合は18.4%であった。ベラルーシ人全体では正教徒が明らかに多数派であったが、ベラルーシ語の書き言葉としての使用・発展へ直接的な影響力をもったと考えられる識字層のベラルーシ人に限ってみればカトリック教徒のベラルーシ人の存在感も決して小さくはなく、その状況は特にベラルーシ・ナショナリズムの中心地であった西ベラルーシにおいて顕著であった（*Киўсава. Переосмысление роли «Белорусской грамматики для школ»*（前注59参照）С. 70-71）。
- 61 なお、タラシケヴィチが『学校のためのベラルーシ語文法』を記すにあたり、いかなるベラルーシ語方言をその基礎としたのかについては、南西方言であるとする説や中央方言であるとする説などいくつかの異なる見解が存在する。*Запрудскі. Беларускае мовазнаўства і развіццё*（前注47参照）С. 87は、『学校のためのベラルーシ語文法』は特定のベラルーシ語方言を基礎に書かれたというよりは、当時の書き言葉の実践を反映しつつ広範なベラルーシ語方言を念頭に書かれたものであったと指摘している。

3.2. 政策的発展の段階（1920年頃～1930年頃）

1919年1月1日、ベラルーシの領域にベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国（BSSR）の創設が宣言されるとベラルーシ語は国家政策の対象となった。BSSRは1920年の（再）独立宣言において、ベラルーシ語、ロシア語、ポーランド語、イディッシュ語の4言語を公的言語として宣言したが⁽⁶²⁾、1921年始めには住民の大部分を占めるベラルーシ語話者の農民層を念頭に、それら4言語のうち特にベラルーシ語による国民教育の実現を教育政策の柱として打ち出した⁽⁶³⁾。標準ベラルーシ語は、作家や民族運動家、言語学者といった特定のエリート層を中心に使用される言語から、ソヴィエト政権のもとで行政や教育といったより広範な社会領域で媒介言語として機能する役割が急速に求められるようになっていった。併せてベラルーシ語の標準語化プロセスは、政府主導の政策的なものへとその性格を変えていった。

政府主導のベラルーシ語の標準語化事業は、特にベラルーシ語による国民教育の実現にとって急務であった学術用語の整備、即ち「用語の近代化」から着手された。その中心的な事業となったのは『ベラルーシ語学術用語辞典』（*Беларуская навуковая тэрміналогія*）⁽⁶⁴⁾の編纂である。同辞典の編纂事業は、1921年2月にBSSR教育人民委員部附属として設立された学術用語委員会（*Навукова-тэрміналагічная камісія*）がその中心的な担い手となって始まった。翌1922年には学術用語委員会を母体にベラルーシ文化研究所（*Інстытут беларускай культуры*）が設立され、専門用語の整備事業は同研究所附属として設立された専門用語委員会（*Тэрміналагічная камісія*）に引き継がれた⁽⁶⁵⁾。同1922年には『ベラルーシ語学術用語辞典』の第1巻が出版され、以後、ベラルーシ文化研究所専門用語委員会は、国内の様々な専門家や学術団体との協力のもと、1922年から1930年までの間に人文社会科学から自然科学に至るあらゆる領域を網羅する専門用語集全24巻を編纂・刊行した⁽⁶⁶⁾。

ベラルーシ語の語彙体系全般の整備、すなわち「語彙化」のプロセスは、ロシア語・ベラルーシ語辞典とベラルーシ語・ロシア語辞典の編纂がそのプロセスの中心的な事業となった。ソヴィエト政権下での辞書編纂事業はベラルーシ文化研究所に設立された辞書編纂委員会を中

62 1920年8月1日付「BSSR独立宣言」（*Дэкларацыя незалежнасці ССР Беларусіі 1 аўгуста 1920 г.*）より（*Дурдзевскі В.Н. Равнопраўе языкоў в савецкім строі. М., 1927. С. 162*）。

63 1921年2月5日付「BSSR中央執行委員会会議における国民教育の問題」（*Пытанні народнай асветы на сесіі ЦВК ССРБ, 5 лютага 1921 г.*）より（*Платонава Р.П., Корушка У.К. Беларусізацыя. 1920-я гады: Дакументы і матэрыялы. Мінск, 1924. С. 32-34*）。BSSRは後に1924年の中央執行委員会「民族政策実施の实践的諸施策についての決定」（*Пастанова 2-й сесіі ЦВК БССР аб практычных мерапрыемствах па правядзенні нацыянальнай палітыкі*）において改めてベラルーシ人が国内で多数派を占めることを理由に4言語の中でも特にベラルーシ語が国家・公的機関等でのコミュニケーションにおける優先言語として選ばれることを明言している（*Платонава., Корушка. Беларусізацыя. 1920-я гады. С. 129-135*）。

64 これ以下の『ベラルーシ語学術用語辞典』に関する内容は *Шчэрбін В.К. «Беларуская навуковая тэрміналогія» // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 86-87* に基づく。

65 ベラルーシ文化研究所は、その後さらに1929年にベラルーシ科学アカデミーへと再編された。

66 『ベラルーシ語学術用語辞典』の1巻から24巻までの延べ語彙数は49,120語に上った。なお同辞典は以下のリンクより電子版が閲覧できる。[https://knihi.com/none/Bielaruskaja_navukovaja_terminolohija_BNT_pdf.zip.html]（2021年6月1日閲覧）

心として進められ、特に言語学者のミカライ・バイコウ(Мікалай Якаўлевіч Байкоў)とシチャパン・ニェクラシェヴィチ(Сцяпан Міхайлавіч Некрашэвіч)が同委員会を率いて辞書編纂に主導的な役割を果たした⁽⁶⁷⁾。ベラルーシ文化研究所ではまず『ロシア語・ベラルーシ語辞典』の編纂が1922年に開始した。辞典の編纂に当たっては、幅広いベラルーシ語の語彙を収録するために、ナソヴィチの『ベラルーシ方言辞典』をはじめとする帝政期から蓄積されてきたベラルーシ語語彙研究の著作や『ベラルーシ語学術用語辞典』の既刊分に掲載された語彙、当時民俗学者と方言学者により進められていたベラルーシ語の口語語彙の収集の成果、さらには作家らによる文学作品中の使用語彙など当時入手可能なあらゆる資料が参照された。また、掲載語彙の選定に際しては、ロシア語に関する辞書類⁽⁶⁸⁾やその他のスラヴ語の辞書類⁽⁶⁹⁾が幅広く参照された。『ロシア語・ベラルーシ語辞典』はその編集作業を1925年の10月に終了し1928年初めに刊行された。一方、『ベラルーシ語・ロシア語辞典』は、特にロシア語との違いが大きな語彙に掲載語彙を絞り、約4ヶ月という非常に短期間で編纂され1925年に刊行された。バイコウとニェクラシェヴィチによる『ロシア語・ベラルーシ語辞典』と『ベラルーシ語・ロシア語辞典』は、ベラルーシ語のもつ語彙資源を一般大衆が広く活用できる形で示し戦間期のベラルーシ語辞書としては最も充実した内容のものとなった。

以上のように、1920年代の現代ベラルーシ語の標準語化は、「用語の近代化」においては、『ベラルーシ語学術用語辞典』(全24巻)の刊行、「語彙化」においては、バイコウとニェクラシェヴィチによる『ロシア語・ベラルーシ語辞典』と『ベラルーシ語・ロシア語辞典』の刊行という着実な成果をみた。「文法規範化」のプロセスについては、1918年にタラシケヴィチが『学校のためのベラルーシ語文法』において示した体系が広く受け入れられ、そのさらなる整備に関しては特別な事業は実施されなかったが、一方で、「文字化」のプロセス、即ち正書法の整備の問題は1920年代に言語学者たちの関心を強く引き激しい議論を巻き起こした⁽⁷⁰⁾。

67 以下、バイコウとニェクラシェヴィチによる『ロシア語・ベラルーシ語辞典』及び『ベラルーシ語・ロシア語辞典』に関する記述は *Байкоў М.Я., Некрашэвіч С.М. Беларуская-расійскі слоўнік. Менск, 1925. С. 3-4.* 及び *Байкоў М.Я., Некрашэвіч С.М. Расійска-беларускі слоўнік. Смаленск, 2014. С. 7-9.* に基づく。

68 そうした辞書類としては、パブロフスキーの『露独大辞典』(*Павловский И.Я. Полный русско-немецкий словарь. Ч.1-2. Рига, 1859*)やマカロフの『露仏大辞典』(*Макаров Н.П. Полный Русско-французский словарь. Петербург, 1889*)、ダーリの『大ロシア語詳解辞典』(*Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. ただし版は不明*)などがあげられている。

69 ウマニェチとスピルカによる『ロシア語・ウクライナ語辞典』(*Уманець М. Спілка А. Словарь російсько-український. 4 томи. Львів, 1893-1898*)やドゥブロフスキーによる『ロシア語・ポーランド語辞典』(*Дубровский П.П. Полный словарь польского и русского языка. Варшава, 1876-1878*)、ミクロシチによる『スラヴ語6言語(ロシア語・教会スラヴ語・ブルガリア語・セルビア語・チェコ語・ポーランド語)及び仏独語簡易辞典』(*Миклошич Ф. Краткий словарь шести славянских языков (русского с церковнославянским, болгарского, сербского, чешского и польского, а также французский и немецкий. СПб., М., Вена, 1885)*)が参照されている。

70 *Запрудскі. Беларуская мовазнаўства і развіццё* (前注47参照)。С. 88. なお、ベラルーシ語の標準語化において「文字化」のプロセスが特に激しい議論を呼んだのは、文法や語彙といった面で近親言語であるロシア語やポーランド語と多くの言語的特徴を共有するベラルーシ語にとって

1920年代に入ったベラルーシでは、ベラルーシ語の使用実践の際にはタラシケヴィチが『学校のためのベラルーシ語文法』で示した正書法が広く踏襲されていた。1918年に刊行された『学校のためのベラルーシ語文法』は1919年、1920年、1921年と1920年代の初めまでに三度にわたって再版を重ね、うち1921年の再版は、ソヴィエト政権が樹立されて間もないミンスクにおいて行われた⁽⁷¹⁾。ソヴィエト政権下のベラルーシにおけるタラシケヴィチの正書規則の普及に大きく貢献したのが、言語学者のヤゼブ・リョーシク（Язэп Юр’евіч Лёсік）である。リョーシクは、『ベラルーシ語実践文法』（*Практычная граматыка беларускае мовы*）⁽⁷²⁾をはじめ、1920年代に数々のベラルーシ語教科書を刊行したが、その執筆にあたってはタラシケヴィチにより確立された正書規則の継承につとめ、タラシケヴィチの正書規則は彼の教科書を通じて広く普及していった⁽⁷³⁾。

しかし、ベラルーシ語の使用そのものが、学校教育分野や出版印刷分野をはじめとするソヴィエト・ベラルーシ国内のあらゆる分野に急速に普及を達成していく中で、タラシケヴィチによる正書規則はその不備が指摘されるようになり、改善を求める声が高まっていった⁽⁷⁴⁾。タラシケヴィチによる正書規則は、原則として20世紀初めに『ナーシャ・ニヴァ紙』等で培われてきた正書法を基礎としたものであったが、一部の規則はベラルーシ語を書き言葉として用いることにまだ不慣れた大衆層には変則的で複雑なものであった。具体的には、母音の綴りに関しては非アクセント下の母音の綴り、特にア音化（ヤ音化）をめぐる規則が問題視され、子音の綴りに関しては特定の条件下で生じる口蓋化をどこまで綴りに反映させるべきかが主な争点となった⁽⁷⁵⁾。更に議論を呼んだのが、借用語の綴りに関する規則である。タラシケヴィチは『学校のためのベラルーシ語文法』において、一部の借用語、特にまだベラルーシ語にとって比較的新しい借用語に対しては、ベラルーシ語固有の語彙とは異なる正書規則を適応することを提案していたものの、肝心の規則については簡易な記述しか残しておらず、規則の再検討の必要性が指摘された⁽⁷⁶⁾。

タラシケヴィチの示した正書法の一部は、その煩雑さから次第に出版物等において公然と無視されるようになり⁽⁷⁷⁾、ベラルーシ文化研究所でもベラルーシ語正書法の再整備が焦眉の課題として広く認識されるようになった。こうして、1926年11月に、約1週間にわたる大規模な国際会議「ベラルーシ語の正書法と文字の改革に関する学術会議」（Акадэмічная

は、綴りや表記というものがそれらの言語との差異を可視化し際立たせる上でとりわけ重要な手段であったことが大きな要因として考えられる。

- 71 BSSR 教育人民委員会の決定により、学校教育用のベラルーシ語文法書の必要を補うことを目的に15,000部の増刷が命じられた（*Запрудскі. Беларускае мовазнаўства і развіццё*（前注47参照）。С. 86）。
- 72 *Лёсік Я.Ю. Практычная граматыка беларускае мовы. Менск, 1921.*
- 73 *Шакун. «Беларуская граматыка для школ»*（前注59参照）。С. 82; *Запрудскі С.М. Лёсік Язэп Юр’евіч // Беларускае мовы: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 306.*
- 74 *Анон. Рэформа беларускага правапісу 1933 года // Беларускае мовы: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 464.*
- 75 *Анон. Рэформа беларускага правапісу 1933 года*（前注74参照）。С. 465。
- 76 *Клімаў І.П. Рэформа 1933 года: перадумовы і наступствы // Роднае слова. 2003. №12. С. 24.*
- 77 *Запрудскі С.М. Беларускае мовазнаўства і развіццё*（前注47参照）。С. 93-94。

канферэнцыя па рэформе беларускага правапісу і азбукі, 以下、「正書法会議」とする)が、ベラルーシ文化研究所の主催により開催されることになった。1926年の正書法会議には、ベラルーシ文化研究所やベラルーシ国立大学など国内の研究者・教員をはじめ当該問題に関心を寄せる国外の専門家や在外ベラルーシ人活動家らが招待されて活発な議論が交わされ、その成果としてベラルーシ語の文字及び正書規則に関していくつかの具体的な提案を採択した⁽⁷⁸⁾。採択された提案は義務的なものではなく勧告としての性格を持ったものであったが、いくつかの内容は後のベラルーシ文化研究所における正書法整備において採択された改革案に生かされることになった⁽⁷⁹⁾。

正書法会議の翌年、1927年にはベラルーシ文化研究所内(1929年からはベラルーシ科学アカデミーに改組)に正書法整備のための専門委員会が組織され、本格的なベラルーシ語の正書法整備プロジェクトが開始された。ニェクラシェヴィチが委員長をつとめ国内の言語学者及び作家が委員会メンバーとしてこれに加わった。正書法委員会は1929年4月まで集中的な議論を重ね、その成果を『ベラルーシ科学アカデミー正書法委員会監修・ベラルーシ語正書法(案)』(Беларускі правапіс (праект). Апрацаваны Правапіснай Камісіяй БАН)として、1930年に出版した。しかし、この頃には既にソ連圏全体が強権的なスターリン体制の下に置かれるようになり、1920年代にソ連諸国で盛んに推進された民族語・民族文化の振興政策は、一転して分離主義を促進するものとして抑圧の対象へと変わった。これに伴い、ベラルーシにおいてもベラルーシ語の標準語化プロセスは停滞期を迎えていった。

3.3. 分裂的發展の段階(1930年頃～1980年代前半)⁽⁸⁰⁾

1930年代に入ると、1920年代にベラルーシ語の標準語化に貢献した言語学者たちの多くは「民族民主主義者」(нацыянал-дэмакрат)⁽⁸¹⁾というレッテルを貼られ、次々に粛清されていった。『ロシア語・ベラルーシ語辞典』と『ベラルーシ語・ロシア語辞典』の編纂に主導的な役割を果たし、正書法委員会の委員長をつとめたニェクラシェヴィチは、1930年7月に逮捕され、最終的に1937年に銃殺された⁽⁸²⁾。また、ニェクラシェヴィチと共に辞書編纂をつとめたバイコウも、1930年半ばに科学アカデミーを解雇されている⁽⁸³⁾。タラシケヴィチによる正書法の普及に大きな役割を果たしたヤゼプ・リョーシクは1930年の7月に逮捕

78 Германовіч І.К. Акадэмічная канферэнцыя па рэформе беларускага правапісу і азбукі // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 19.

79 Германовіч. Акадэмічная канферэнцыя па рэформе (前注 78 参照). С. 21.

80 本節の記述は特に明記しない限り *Апол.* Рэформа беларускага правапісу 1933 года (前注 74 参照). С. 464-467. 及び、*Клімаў.* Рэформа 1933 года (前注 76 参照). С. 24-26. に基づく。

81 訳語はマーチン・テリー (半谷史郎監修, 荒井幸康・渋谷謙次郎・地田徹朗・吉村貴之訳)『アフターマティヴ・アクションの帝国:ソ連の民族とナショナリズム、1923年～1939年』明石書店、2011年、257頁による。

82 Германовіч І.К. Некрашэвіч Сцяпан Міхайлавіч // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 388.

83 Германовіч І.К. Байкоў Мікалай Якаўлевіч // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 69.

され、最終的には1940年に流刑先のサラトフで獄死した⁽⁸⁴⁾。

スターリン体制の幕開けと共に、1930年に発表された『ベラルーシ科学アカデミー正書法委員会監修・ベラルーシ語正書法(案)』もまた「民族民主主義的」な企みという非難を受け、公式な承認を得るには至らぬまま秘匿文書扱いとなり特殊保管所に葬られることになった。また、語彙体系の整備に関わっては、1925年より現代ベラルーシ語の大規模な詳解辞典の編纂事業が進められていたが、リーダーを務めていたニェクラシェヴィチの逮捕により辞書編纂は中止となった⁽⁸⁵⁾。さらに1930年までに24巻を刊行していた『ベラルーシ語学術用語辞典』に関しては、追加の巻号の編纂・刊行が計画されていたものの、これも辞書編纂を担ってきた学者たちの相次ぐ逮捕により、計画が実現に至る前に中断されてしまった⁽⁸⁶⁾。

こうして1920年代にソヴィエト政権下で着実な成果を上げてきたベラルーシ語の標準語化事業は、1930年代に入り極めて政治的な理由により停滞へと追い込まれた。1930年代は、ソ連全体でもロシア文化を連邦内の諸民族統合の推進力とする方針がとられるようになり、言語政策に関しては学校教育におけるロシア語の必修化が命じられ、各国の標準語整備において民族語に対するロシア語の影響力の強化が目指された⁽⁸⁷⁾。ベラルーシ語の標準語化のプロセスもこうした政治状況の転換の煽りを直に受け、政府主導の標準ベラルーシ語の整備の取り組みについては、標準ロシア語をモデルとする方向付けが正当性を持つものとなっていった。

スターリン体制の開始と共に1930年の正書法案は白紙となった一方で、ベラルーシ語の使用実践の現場では依然として正書法の整備が強く必要とされていた。こうした中、1930年3月にベラルーシ科学アカデミー言語学研究所は再び正書法案の作成プロジェクトに着手し、1933年に『ベラルーシ語正書法簡易化案』(Праект спрашчэння беларускага правапісу)を発表した。しかし、この1933年の正書法簡易化案は、事実上、1930年の正書法案のほぼなぞりであったことから、共産党政権側はこれをそのまま受け入れることには同意せず、独自にその内容を精査し変更を加えることを決定する。こうして1933年3月に、ベラルーシ共産党中央委員会の附属という形で科学アカデミー言語学研究所の正書法簡易化案の検討委員会が再び組織された。共産党の肝いりで設立された同委員会は、当時科学アカデミー言語学研究所の所長であったピョートル・ブズク(Пётр Апанасавіч Бузук)⁽⁸⁸⁾を始めとするごく限られた言語学者からの助言に基づいて正書法改革案の準備を進めていった。こうして、1933年8月26日にBSSR人民委員会議によって『ベラルーシ語正書法の変更と簡易化についての決定』(Пастанова Савета Народных Камісараў БССР «Аб зменах і спрашчэнні

84 *Запрудскі. Лёсік Язэп Юр'евіч* (前注73参照). С. 306.

85 *Германовіч. Некрашэвіч Сцяпан Міхайлавіч* (前注82参照). С. 388.

86 *Шчэрбін. «Беларуская навуковая тэрміналогія»* (前注64参照). С. 87.

87 マーチン・テリー『アフアーマティヴ・アクションの帝国』(前注81参照)50-51, 54-553頁;
Клімаў. Гісторыя складвання двух стандартаў (前注6参照). С. 42.

88 その後、ブズクは1934年初めに逮捕されてヴォログダへ3年間流刑となった後、1937年に再逮捕され銃殺された(*Рамановіч Я.М., Юрэвіч А.К. Бузук Пётр Апанасавіч // Беларуская мова: энцыклапедыя / пад. рэд. Б.І. Сачанка і інш. Мінск, 1994. С. 99*).

беларускага правапісу») が採択され、正書法改革が実施された。

1933年の人民委員会議による正書法改革は、正書規則の簡易化によって一般大衆のベラルーシ語使用における負担を軽減することを名目的に掲げていたものの、実際のところそれは単に広範な使用者に配慮した標準ベラルーシ語の確立を目指すものではなく、スターリン体制の政治的文脈に強く従属させられた言語の実体計画への介入であった。1933年の『ベラルーシ語正書法の変更と簡易化についての決定』に付された前文にはこれが明らかであり、そこでは1920年代のベラルーシ語標準語化のプロセスで達成された「用語の近代化」、「語彙化」、「文字化」などの成果がことごとくロシア語とベラルーシ語の人為的な分離を企図した言語学者たちの策謀であったと断じられ、それらは「民族民主主義的」な企みであると強く批判されている⁽⁸⁹⁾。正書法改革の内容は、まだ書き言葉としての伝統が浅く可塑性の大きかった標準ベラルーシ語の規範に対して、標準ロシア語の影響を、正書法はもちろん形態変化や統語といった領域まで定着させようとする内容であった⁽⁹⁰⁾。ただし、クリマウやルサークが指摘するように1933年の人民委員会議による正書法改革で示された規則は、1920年代までの正書法の修正をめぐる議論を全く無視したのではなく、その一部は1926年の正書法会議で採択された提案や科学アカデミー言語学研究所が手がけた1930年と1933年の正書法案で提示された規則を取り入れたものであった⁽⁹¹⁾。しかし、発表された正書法改革の文書においては、その内容が先行する1926年の正書法会議や科学アカデミー言語学研究所による1930年と1933年の正書法案で提示された提案を踏まえていることには一切言及が見られず、先行する標準語化プロセスの成果であるという事実は黙殺された。

BSSR 人民委員会議により正書法改革が実施された翌年の1934年には、この言語改革の内容を踏まえた『ベラルーシ語正書法』(Правапіс беларускай мовы)⁽⁹²⁾が、ベラルーシ科学アカデミー言語学研究所から正式に出版された。皮肉にも、1920年代の正書法整備をめぐる議論の成果である1930年と1933年の正書法案が正式な採用に至らなかったことから、これがソ連時代のベラルーシにおける最初の政府公認の正書法規範となった。しかしながら、この言語改革の内容はソヴィエト・ベラルーシの域外のベラルーシ人コミュニティの間では支持を得るものとならず、これを端緒として標準ベラルーシ語の規範は分裂的な発展の段階へと突入していった。こうした言語規範の分裂的発展を助長することになったのが、当時のベラルーシがソヴィエト政権下の東ベラルーシとポーランド統治下の西ベラルーシに二分されていたという政治的状況である。

これまで検討してきたように、1920年代以降ソヴィエト・ベラルーシでは一貫して国家

89 *Беларуская акадэмія навук, Інстытут мовазнаўства. Правапіс беларускай мовы. Менск. 1934. С. 3-4.*

90 *Клімаў. Гісторыя складвання двух стандартаў* (前注6参照). С. 43. また、この正書法改革では借用語の転写規則として「インターナショナル革命に関する単語及びその派生語は全て、ア音化の一般規則に従わせない」というような、共産主義や革命にかかわる「国際的な語彙」についてロシア語の正書法を保持することを求める規則も取り入れられた。

91 *Клімаў. Рэформа 1933 года* (前注76参照). С. 24-25; *Русак. Стаўленне норм беларускай* (前注27参照). С. 31-33.

92 「正書法」と題されたが、1933年の言語改革で言及された形態変化や統語に踏み込んだ規則がいくつ含まれた。

主導でベラルーシ語の標準語化が推進されてきたが、戦間期にソヴィエト政権下にあったのは現在のベラルーシ地域の東部のみであった。西部は第一次世界大戦後の1921年のリガ協定によってポーランド領に編入されており、そこでは国家がベラルーシ語に関する言語政策を主導する東ベラルーシとは異なり、作家や社会活動家といったベラルーシ人の民族派エリート個人々の活動が主体となって標準ベラルーシ語の使用実践が維持される状況にあった⁽⁹³⁾。1920年代の段階では、こうした政治的条件を異にする2つのベラルーシ地域、即ちソヴィエト政権下の東ベラルーシとポーランド統治下の西ベラルーシの両地域が、共にベラルーシ語の使用実践においてはタラシケヴィチによる正書法と文法規範を支持するという形で緩やかな協調関係を保っていた⁽⁹⁴⁾。だが1930年代に入り、東ベラルーシがスターリン体制の下におかれるようになると、この関係は大きく変化する。特に1933年に東のソヴィエト・ベラルーシで実施された正書法改革は大きな転換点となった。

1933年8月にソヴィエト政権下の東ベラルーシにおいて実施された正書法改革は、その明らかな政治性ゆえに、ポーランド領であった西ベラルーシ（ヴィリニウスを含む）をはじめ、ラトヴィア、プラハ、ベルリンなどの在外ベラルーシ人コミュニティの間では受け入れられなかった⁽⁹⁵⁾。戦間期の西ベラルーシにおいてベラルーシ人知識人の言論活動に中心的な役割をはたしたベラルーシ語新聞『ベラルースカヤ・クリニツァ紙』（Беларуская крыніца）は同年10月8日付の第34号の一面に「ベラルーシ語に対する前代未聞の撲滅運動」（Нябывалы паход супроць беларускае мовы）という見出しで批判記事を出した。



図2 1933年の正書法改革を一面で報道する『ベラルースカヤ・クリニツァ紙』（1933年、第34号）⁽⁹⁶⁾

また、ヴィリニウスを拠点に活動を行っていたベラルーシ学術協会（Беларускае навуковае таварыства）は、人民委員会議による正書法改革はベラルーシ語のロシア化を企図して学術

93 *Клімаў*. Гісторыя складвання двух стандартаў（前注6参照）。С. 43.

94 *Клімаў*. Гісторыя складвання двух стандартаў（前注6参照）。С. 43.

95 *Клімаў*. Гісторыя складвання двух стандартаў（前注6参照）。С. 43.

96 С.К. Нябывалы паход супроць беларускае мовы // Беларуская крыніца. № 34. 1933.

的に根拠薄弱なまま強行された許しがたいものであるとして異議申し立てを決議し、それを声明文として発表して東ベラルーシのポリシェヴィキ政権との緊張関係を強めた⁹⁷⁾。こうして、ポーランド領西ベラルーシ及びヨーロッパのその他の在外ベラルーシ人の間では人民委員会議による正書法改革の内容は受け入れられることなく、1933年以降もタラシケヴィチ規範に則ったベラルーシ語使用が継承されていくことになった。即ち、1933年の人民委員会議による正書法改革は、標準ベラルーシ語が統一的な発展の方向性を失いその規範が分裂的な発展へと向かっていく分水嶺となった。これ以降、タラシケヴィチ規範の使用はソヴィエト・ベラルーシの域外の在外ベラルーシ人のコミュニティがその担い手となっていった。

その後、1939年に東のソヴィエト・ベラルーシが西ベラルーシ（ただしヴィリニウスは除く）を併合すると、反ソヴィエト的なベラルーシ人知識人たちは西ベラルーシを追われヨーロッパの様々な都市へと逃れた。そうした亡命ベラルーシ人たちの多くが活動拠点とした都市のひとつがナチス政権下のドイツ、ベルリンであった⁹⁸⁾。1941年6月の終わりにナチス・ドイツ軍が不可侵条約に反してソ連領へ進撃を開始し、ソヴィエト政権下にあったベラルーシを8月末までに全面的に占領下に置くと、西ベラルーシからドイツへと逃れていた亡命ベラルーシ人たちはナチス占領下におかれた祖国ベラルーシに帰国を果たした。彼らは、ナチス・ドイツ軍のプロパガンダに手を貸しながら、占領統治下のベラルーシにおいてベラルーシ語による出版活動を行う権限を与えられ、新聞や書籍の刊行に尽力した。彼らが用いたベラルーシ語は、1933年以降も西ベラルーシにおいて維持されてきたタラシケヴィチ規範に基づくものであったことから、ナチス・ドイツの占領下におけるベラルーシでは一時的にタラシケヴィチ規範のベラルーシ語の使用が復活することになった。

ベラルーシ語による言論活動を展開した元亡命知識人たちは、タラシケヴィチによる正書法と文法規範を自ら用いるのみならず、ナチス・ドイツ占領下のベラルーシ域内でのその普及も目指した。これは、タラシケヴィチの『学校のためのベラルーシ語文法』が『ベラルーシ語文法』（*Беларуская граматыка*）という表題で、1943年に占領下のミンスクにて再版されていることから明らかである⁹⁹⁾。しかし、1944年夏に赤軍の解放作戦によってベラルーシがナチス・ドイツの占領から解放されると、知識人たちは再びベラルーシの地を離れることを余儀なくされ、結局、ベラルーシにおけるタラシケヴィチ規範の再普及の試みは失

97 *Клімаў*: Гісторыя складвання двух стандартаў (前注6参照), С. 43.

98 ベルリンではこうしたベラルーシ人の亡命知識人を中心として、内務省内に「ベラルーシ代表部」(Беларускае прадстаўніцтва)が組織され、さらに1940年にはこのベラルーシ代表部の付属として、ワルシャワ、ウッチ、ポズナン、ウィーン、ミュンヘンなどにも支部を持つ「ベラルーシ相互援助委員会」(Беларускі камітэт самадапамогі)が組織されていた(*Жураўск, А.І. Рэформа правапісу: як гэта было // Настаўніцкая газета. № 43-45, 48-50. 1991.* これ以降のナチス・ドイツ占領下のベラルーシの状況に関する記述も特に明記しない限り *Жураўскі. Рэформа правапісу: як гэта было.* に基づく)。

99 このときミンスクで出版されたタラシケヴィチの『ベラルーシ語文法』(『学校のためのベラルーシ語文法』第6版)は、前書きにおいて占領下の学校においての使用を見込んで刊行されたことが明記されており、亡命知識人たちは学校教育を通じたタラシケヴィチ規範の普及を企図していたことが伺われる(*Тарашкевіч Б.А. Беларуская граматыка: выданьне шостае. Менск, 1934. С. 4*)。

敗に終わった。第二次世界大戦後は、亡命ベラルーシ人たちの新たな移住先である西ドイツやイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア等で、彼らを中心として形成されていった在外ベラルーシ人コミュニティの間でタラシケヴィチ規範に基づくベラルーシ語使用の伝統が維持されていくことになった。

第二次世界大戦後、ソヴィエト政権下のベラルーシでは、BSSR 科学アカデミー言語学研究所内に設置された正書法委員会を中心に 1934 年のベラルーシ語正書法（1933 年の正書法改革を踏まえた正書法）について修正と補足が進められ、1959 年に新たな正書法規則である『ベラルーシ語の正書法及び句読法の規則』（Правілы беларускай арфаграфіі і пунктуацыі）が BSSR 科学アカデミー言語学研究所より刊行された。ただし、1959 年の新正書法は、あくまでも 1934 年の正書法の不備を是正し最低限の補足を加えることを目指したものであり、基本的な内容は 1934 年の正書法において定められた内容を引き継いだものであった。こうして 1934 年の正書法を基礎に定められた 1959 年の新たな正書法は、戦後のベラルーシにおける公式なベラルーシ語正書法規範として学校教育等を通じ国内のベラルーシ語使用の現場において広く定着していくことになった。

戦後のベラルーシにおいては、正書法規則の整備、即ち「文字化」のプロセスのみならず、「文法規範化」や「語彙化」の分野に関しても、科学アカデミー言語学研究所が中心となって文法書や辞書類の編纂・刊行が実施された。「文法規範化」に関しては、1962～1966 年に本格的なアカデミー文法である『ベラルーシ語文法』（全 2 巻）が BSSR 科学アカデミー言語学研究所より刊行され、1985～1986 年には、60 年代のアカデミー文法に続いて新たな『ベラルーシ語文法』（全 2 巻）が、同じく BSSR 科学アカデミー言語学研究所より新たに刊行された。また、「語彙化」に関しては、1953 年に『ロシア語・ベラルーシ語辞典』、そして 1962 年には『ベラルーシ語・ロシア語辞典』がそれぞれ BSSR 科学アカデミー言語学研究所より刊行された。さらに、戦後は、戦前に実現しなかった詳解辞典の編纂事業も本格的に着手され、1977 年から 1984 年までの 8 年間の間に全 5 巻からなる『ベラルーシ語詳解辞典』が BSSR 科学アカデミー言語学研究所より刊行された。収録された語彙数は約 10 万語に上り、高等教育や学術研究、さらには出版や放送メディアなどベラルーシ語の使用されるあらゆる分野の語彙をカバーした辞典となった。

このように戦後のベラルーシでは、科学アカデミー言語学研究所による正書法、文法書、辞書類の編纂と出版を通してベラルーシ語の標準語化のプロセスは進展し、公式規範はこれらの辞書類や文法書を通じて一定の安定性を確立していった。また、いわゆる雪解けの時期にはスターリン体制期に粛清された言語学者たちの名誉回復も行われた⁽¹⁰⁰⁾。

一方で、戦後のベラルーシ社会全体を通じては、ベラルーシ語の使用そのものが限定された状況にあったことは指摘しておかねばならない。特に、ソヴィエト政権下の言語教育政策においてはロシア語の地位の強化が進められ、ベラルーシ語そのものの社会への普及は、実

100 『学校のためのベラルーシ語文法』の著者であるタラシケヴィチおよび 1920 年代のベラルーシ語の標準語化事業を主導したニェクラシェヴィチは 1957 年に、多くの文法書を執筆・出版しタラシケヴィチ規範の普及に貢献したヤゼプ・リョーシクは 1958 年にそれぞれ名誉回復された（Возвращенные имена: Сотрудники АН Беларуси, пострадавшие в период сталинских репрессий / Сост. Н. В. Токарев. Минск: Навука і тэхніка, 1992. С. 67, 81, 106）。

質的に抑制された状況に置かれていった。1958 年末にソ連全体でロシア語を教授言語とする学校における民族語の学習が、生徒及びその親の意思に基づく選択制となると⁽¹⁰¹⁾、ベラルーシ国内においては、ベラルーシ語学習を軽視する態度が大衆の間に広く浸透した。また、新聞や雑誌など出版分野におけるベラルーシ語の使用も振るわず、民族語による出版物数はソ連諸国内でも特に低かった⁽¹⁰²⁾。

3.4. 競争的発展の段階（1980 年代後半～2010 年頃）⁽¹⁰³⁾

1980 年代後半、ソ連圏全体がペレストロイカ期を迎え、政治や社会生活の様々な側面で自由化が進んで行くとベラルーシにおけるベラルーシ語をめぐる状況にも変化が訪れた。民族派の知識人層を中心としてベラルーシ国内における標準ベラルーシ語の実質的な使用領域の狭さに対する懸念が盛んに叫ばれるようになり、ベラルーシ語に国家語の地位を付与して改めて社会に広く普及しようとする動きが活発化した。1990 年には「BSSR における諸言語についての法律」（Закон аб мовах у Беларускай ССР）が採択されベラルーシ語は BSSR 国内唯一の国家語としての法的地位を付与された⁽¹⁰⁴⁾。

また、国内で使用されるベラルーシ語そのものについても重要な変化が生じていった。ペレストロイカ期に入ると、ベラルーシにおいては社会生活の自由化と共産党政権の弱体化の結果、それまでであれば当局の検閲により厳しく取り締まられてきたタラシケヴィチ規範に基づくベラルーシ語使用の実践が、在外ベラルーシ人コミュニティから徐々に国内のベラルーシ語使用の領域に流入するようになった。それは、非政府系・独立系の出版物はもとより政府公認の出版物にもしばしば公然とみられるようになり⁽¹⁰⁵⁾、ベラルーシ人知識人層の間ではソ連時代に確立されてきた標準ベラルーシ語の独自性が疑問視されるようになっていった。知識人層の中でも特にこの問題に敏感に反応したのはジャーナリストや作家たちであり、彼らを中心として 1933 年の正書法改革をスターリン体制期の民族抑圧的な政治やロシア化政策を体現するものとして非難する言説が新聞や雑誌等において盛んに展開された⁽¹⁰⁶⁾。

そうした一部の知識人層の間では、タラシケヴィチ規範のベラルーシ語は 1933 年の正書法改革の内容を基礎に発展してきた公式規範のベラルーシ語と比べてロシア語からの影響が相対的に小さくロシア化に打ち克った「真正な」標準ベラルーシ語の存在可能性を体現す

101 Баричэўска Н. Беларуская эміграцыя : абаронца роднае мовы. Варшава, 2004. С. 153-154

102 Жураўскі., Прыгодзіч. Гісторыя беларускай літаратурнай мовы (前注 30 参照). С. 156.

103 本節の記述は特に明記しない限り *Клімаў*: Гісторыя складвання двух стандартаў(前注 6 参照). С. 44-46 に基づく。

104 Русак, В.П. Стаўленне норм беларускай (前注 27 参照). С. 39. なお、この法律ではベラルーシ語のみが「国家語」という地位を与えられたが、それは他の言語の使用を大きく制限するような排他的な性格のものではなかった。具体的には、同法によって「民族間交流語」として定義されたロシア語もまたベラルーシ国内でその使用が大幅に許容された。詳しくは、清沢紫織「言語の地位計画にみるベラルーシの国家語政策：ベラルーシ語とロシア語の法的地位をめぐって」日本言語政策学会『言語政策』13 号、2017 年、55-59 頁を参照。

105 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注 3 参照). С. 20-25, 29-33; *Клімаў*: Гісторыя складвання двух стандартаў (前注 6 参照). С. 44.

106 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注 3 参照). С. 20-21.

るものと目されるようになっていった。やがて1920年代に確立されたタラシケヴィチの規範への回帰こそが母語の真の復興であり、ソ連時代に発展が中断された言語伝統の再生であるという主張が叫ばれるようになった⁽¹⁰⁷⁾。この頃より、ソ連時代を通じて確立されてきた標準ベラルーシ語の公式規範は、1933年に正書法改革を実施した人民委員会議(Савет народных камісараў)に因んで、「ナルカマウカ規範」(наркамаўка)と差別的なニュアンスを伴って呼ばれるようになり⁽¹⁰⁸⁾、タラシケヴィチの『学校のためのベラルーシ語文法』を基礎に確立された1920年代の標準語規範はタラシケヴィチに因んでタラシケヴィチ規範(тарашкевіца)と呼ばれるようになった⁽¹⁰⁹⁾。

タラシケヴィチ規範の支持者たちの実際の言語使用においては公式規範を無視したベラルーシ語の使用実践が顕著となった。例えば、正書法においては、逆行同化によって生じる子音の口蓋化を軟音記号ъによって明示すること(例えば、公式規範での снег「雪」、злева「左から」、дзверы「ドア」をсьнег, злева, дзверыと綴る)、子音シュー音の同化をより発音に近づけて綴ること(例えば、公式規範での чэшскі「チェコの」、парыжскі「パリの」、рыжскі「リガの」をчэскі, парыскі, рыскіと綴る)、前置詞 без と否定助詞 не を第一音節アクセントの語の前では бяз と ня と綴りヤ音化(яканне)を明示すること(例えば、公式規範での без до́ма「家無しで」、не ма́ю「(私は)持っていない」を бяз до́ма, ня ма́ю と綴る)、一部の外来語の表記において軟子音と硬子音の使い分けを公式規範と異なる形で行うこと(例えば、公式規範での клуб「クラブ」、праспект「大通り」、газета「新聞」、Еўропа「ヨーロッパ」を клюб, праспэкт, газэта, Эўропа と綴る)などが実践された⁽¹¹⁰⁾。また、形態変化については女性名詞の複数生格形について公式規範では語尾 -ей とゼロ語尾が使い分けられるところを全て男性名詞や中性名詞の複数生格形と同様の語尾 -аў (-яў) で統一しようとする(例えば、公式規範での літар [単数主格: літара「文字」、праблем [単数主格: праблема「問題」、асаблівацей [単数主格: асабліваць「特徴」、радасцей [単数主格: радасць「喜び」、), літараў, праблемаў, асаблівацяў, радасцяў と綴る)、語彙の使用においてはロシア語との同根語彙をポーランド語やウクライナ語からの借用語と置き換えようとする(例えば、працэнт「パーセント」の代わりに адсотак [ポーランド語: odsetek, ウクライナ語: відсоток] を用いる、мерапрыемства「イベント」の代わりに імпрэза [ポーランド語: impreza] を用いるなど)といったことが行われた⁽¹¹¹⁾。

107 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照). С. 27-28.

108 このナルカマウカ(наркамаўка)という呼称は、公式規範の基礎となっている1933年の正書法改革がBSSRの人民委員会議(савет народных камісараў)によって実施されたことに因んでV. ヴャチョルカ氏(В. Вячорка)が考案したものである(Запрудскі. Варыянтнасць у беларускай літаратурнай мове (前注5参照). С. 26)。

109 この他、タラシケヴィツァはしばしば正統正書法(клясычны правапіс)とも呼ばれる。タラシケヴィツァという呼称は現在一般化したものとして普及しているが、元々はこの規範の有力な支持者の一人である言語学者V. ヴャチョルカ氏(Вінцук Вячорка)が1982年に考案したものである(Вячорка P.B. Беларуская Wikipedia: афіцыйным і клясычным правапісам [https://soundcloud.com/svaboda/viachorka1011tarashkevica] 2021年6月1日閲覧)。

110 Запрудскі С.М. Праблемы нормы і варыянтнасці (前注5参照) С. 21.

111 Русак, В.П. Стаўленне норм беларускай (前注27参照). С. 46-47, 49.

1991年のソ連崩壊に伴ってベラルーシが独立国家となると、政府は標準ベラルーシ語規範をめぐる混乱、特に正書法の不統一の問題を収束させるべく、1993年に「ベラルーシ語正書法の精緻化に関する国家委員会」(Дзяржаўная камісія па ўдакладненні правапісу)を組織し、2つの標準ベラルーシ語規範(特に正書法)の統合と整備に着手した。しかし、同委員会は翌1994年、強力な親ロシア路線を掲げるルカシェンコ政権の発足から2か月後の9月に「現行のベラルーシ語正書法は、あらゆる言語使用領域でベラルーシ語が書き言葉として機能することを十分に保障するもので抜本的な変更を要しない」という見解を正式発表し、標準語規範統一の取り組みはわずか2年足らずで頓挫した⁽¹¹²⁾。標準語規範の政策的な統合が進まない中、1998年にはタラシケヴィチ規範のベラルーシ語を使用していた独立系ベラルーシ語新聞ナーシャ・ニヴァ紙をめぐる訴訟が起こされ、同紙の言語使用が違法であるかどうか科学アカデミーの言語学者を巻き込んで法廷で争われるという事態まで生じた(4.1にて詳述)。その後、1999年に再度「ベラルーシ語正書法の変更と精緻化に関するプロジェクト」(Праект зменаў і ўдакладненняў арфаграфіі)がベラルーシ科学アカデミー言語学研究所により開始されたが、この頃すでに言語学研究所は90年代前半に目指された2つの標準ベラルーシ語規範の統合を先導する役割よりもソ連時代に確立されてきた規範の保護の役割を担う保守的な立場を取るようになっていた⁽¹¹³⁾。

2000年代に入ると、タラシケヴィチ規範はベラルーシ国内の非政府系・独立系の新聞や専門誌及びインターネットメディアを中心に広く使用されるようになった。学校教育においては依然として公式規範に基づくベラルーシ語が用いられていたが、タラシケヴィチ規範の支持者たちは自発的に正書法を中心とするその言語規範を身につけ自身のベラルーシ語使用において拠り所とした。2005年にはタラシケヴィチ規範の支持派のヴィンツーク・ヴァチョルカ(Вінцук Вячорка)、ジミチェル・サウカ(Зміцер Саўка)といった言語学者のグループにより、現代版のタラシケヴィチ規範(特に正書法に特化したもの)である『ベラルーシ語正統正書法』(Беларускі клясычны правапіс)⁽¹¹⁴⁾が出版された。同正書法規則集は、刊行と同時にラジオ・リバティエーのベラルーシ語版(Радыё Свабода)⁽¹¹⁵⁾のサイト上にも公開され、広く国内外に向けて発信されている⁽¹¹⁶⁾。

一方、公式規範(特に正書法)に関しては、ベラルーシの独立後から断続的ながら続けられてきた1959年の正書法の改定をめぐる議論が、2000年代の半ばにようやく形となり、2008年に『ベラルーシ語の正書法及び句読法の規則』(Правілы беларускай арфаграфіі і

112 Руска В.П. Стаўленне норм беларускай (前注27参照)。С. 43.

113 Рамза Т.Р. Надзённыя пытанні беларускай лінгвістыкі // Беларуская мова і мовазнаўства на рубяжы III тысячагоддзя: Матэрыялы навуковай канферэнцыі, прысвечанай 70-годдзю Інстытута мовазнаўства імя Якуба Коласа НАН Беларусі (2-3 лістапада 1999 г.). Мінск, 2000. С. 145-146.

114 Бушлякоў Ю.С., Вячорка В.Р., Санько З., Саўка З. Беларуская клясычны правапіс. звод правілаў: сучасная нармалізацыя. Вільня-Менск, 2005.

115 現在もタラシケヴィチ規範を使用している代表的なベラルーシ語ニュースサイトである。

116 “Беларускі клясычны правапіс” — на вэб-сайце svaboda.org [https://www.svaboda.org/a/799680.html] (2021年6月1日閲覧)

пунктуацыі)として正式に採択された⁽¹¹⁷⁾。新たに発表された正書法では、1959年正書法にみられた綴り上の例外を大幅に減らし、また、ベラルーシ語に比較的新しく流入してきた語彙の綴り規則を追加するなどの変更が加えられた。しかしながら、この2008年の正書法改正も、1959年同様にその変更点は最低限のものに留められ、大部分が1934年正書法から1959年正書法に引き継がれてきたものを継承する内容であった。

改定された正書法の内容と合わせて注目されるのは、2008年の新正書法発表と共に採択された「ベラルーシ語の正書法及び句読法の規則についての法律」(Закон аб правілах беларускай арфаграфіі і пунктуацыі)である。同法律は、新たな正書法規則の国内諸分野における使用開始の時期などを具体的に定めたものであるが、その第2条には、以下のような内容が定められた。

第2条 国家機関、その他の組織、ベラルーシ共和国国民、またベラルーシ共和国領内に継続的に居住しているあるいは一時的に滞在している外国人国民と国籍を持たない個人は、文語ベラルーシ語の使用の全ての分野と状況において、本法律によって承認されるベラルーシ語の正書法及び句読法の規則に従わねばならない。

「ベラルーシ語の正書法及び句読法の規則についての法律」(2008年)より⁽¹¹⁸⁾

この条文には、タラシケヴィチ規範への直接の言及は見られないものの、国内の出版物、メディア等でタラシケヴィチ規範に基づくベラルーシ語使用を事実上禁止する内容のものであることは明白である。ちなみに1959年正書法の採択の際にも同様の法律が採択されたが、この時は正書法の遵守を義務的なものとする領域としては教育分野にしか言及がなかった⁽¹¹⁹⁾。この点を考慮すると、2008年の新正書法はより積極的にベラルーシ語の使用実践の管理へと踏み込むものであると言える。この法律の採択により、それまでタラシケヴィチ規範に則ってベラルーシ語を用いていたベラルーシ国内の新聞や雑誌は、法律の発効日とされた2010年9月1日までには軒並み公式規範への切り替えを余儀なくされた。即ち、ベラルーシ政府は、公式規範とタラシケヴィチ規範をめぐる対立に関し、話し合いによる合意形成という形ではなく、法律によってタラシケヴィチ規範の使用を事実上禁止する形で幕引きをはかろうとしている。

しかし、2008年に採択されたこの法律(2010年発効)によるタラシケヴィチ規範の禁止の一方で、ベラルーシ語を恒常的に使用する知識人層、ジャーナリスト、一般市民の一部によるタラシケヴィチ規範の使用は現在までも根強く続いている。特に、2000年代以降にはベラルーシにおいてもブログやソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)が急速に

117 ただし、法律の実施は2010年とされた。

118 Закон Рэспублікі Беларусь аб правілах беларускай арфаграфіі і пунктуацыі // Нацыянальны цэнтр прававой інфармацыі Рэспублікі Беларусь. Правілы беларускай арфаграфіі і пунктуацыі. Мінск, 2008. С. 5.

119 Аб удакладненні і частковых зменах існуючага беларускага правапісу (Пастанова Савета Міністраў БССР ад 11 мая 1957 года) // Акадэмія навук БССР. Правілы беларускай арфаграфіі і пунктуацыі. Мінск, 1959. С. 7-8.

普及したことにより、出版物等を介さずに個人が直接情報発信することが大幅に可能になった。こうした背景からタラシケヴィチ規範に基づくベラルーシ語の使用は、インターネットメディアを中心に私的な言語使用領域において根強く継続されている。さらにベラルーシ国外で刊行されたベラルーシ語出版物や、ベラルーシ国外に活動拠点を置くニュースメディア、団体等においても、依然としてタラシケヴィチ規範に基づくベラルーシ語の使用は続けられている。

今日、公式規範とタラシケヴィチ規範の使用実践の例として最も象徴的なものはベラルーシ語版のウィキペディアであろう。ベラルーシ語版のウィキペディアは、正規のベラルーシ語版（公式規範版）の他にタラシケヴィチ規範版が、現在に至るまで統合されることなく存在している。その概要は次の表6のとおりである。

表6 2つのベラルーシ語版ウィキペディア⁽¹²⁰⁾

	公式規範版	タラシケヴィチ規範版
名称の表記	Вікіпедыя – Свабодная энцыклапедыя 	Вікіпэдыя – Вольная энцыкляпэдыя 
URL	https://be.wikipedia.org/	https://be-tarask.wikipedia.org/
開始日	2007年3月27日より運営開始 ⁽¹²¹⁾	2004年8月12日より運営開始 ⁽¹²²⁾
記事数	205,182記事(2021年6月1日現在)	74,575記事(2021年6月1日現在)

まず注目されるのが、ベラルーシ語版のウィキペディアは、公式規範版に先んじてタラシケヴィチ規範版が運用を開始している点である。記事数についても、現在は公式規範版がタラシケヴィチ規範版を大きく上回っているものの、2012年の半ばまでは一貫してタラシケヴィチ規範版の記事数が公式規範版の記事数を上回る状況にあった⁽¹²³⁾。2012年以降の公式規範版ウィキペディアとタラシケヴィチ規範版ウィキペディアの記事数の逆転をどのように解釈するかは難しい問題だが、一つの可能性として、2010年より発効したタラシケヴィチ規範の使用を非合法とする法的措置の影響によって一定のベラルーシ語使用者層が、タラシケヴィ

120 ベラルーシ語公式規範版ウィキペディア [<https://be.wikipedia.org/>] (2021年6月1日閲覧) 及びタラシケヴィチ規範版ウィキペディア [<https://be-tarask.wikipedia.org/>] (2021年6月1日閲覧) を参照し筆者作成。

121 ベラルーシ語公式規範版ウィキペディア記事 *Беларуская Вікіпедыя* [https://be.wikipedia.org/wiki/Беларуская_Вікіпедыя] (2021年6月1日閲覧) より。

122 ベラルーシ語タラシケヴィチ規範版ウィキペディア記事 *Беларуская Вікіпэдыя* [https://be-tarask.wikipedia.org/wiki/Беларуская_Вікіпэдыя] (2021年6月1日閲覧) より。

123 [<https://stats.wikimedia.org/EN/Sitemap.htm>] (2021年6月1日閲覧) 参照。

チ規範から公式規範へシフトしていったことが考えられるだろう。一方で、ベラルーシの社会言語学的状況を長年研究しているクルト・ヴルハイザー (Curt Woolhiser) は、都市部の若いベラルーシ語話者層の間で、学校教育で学んできた公式規範よりもタラシケヴィチ規範がより「真正な」ベラルーシ語規範と見なされている実態の一端を明らかにしており⁽¹²⁴⁾、タラシケヴィチ規範はベラルーシ社会の中で一定の支持を得ていることも事実である。

また、今日の公式規範とタラシケヴィチ規範という2つの標準ベラルーシ語規範の対立という言語状況下において、問題をさらに複雑化している要因としてベラルーシ政府のベラルーシ語普及そのものに対する消極的な姿勢も無視できない。現在ベラルーシにおいて、ベラルーシ語は国家語という高い地位を与えられてはいるものの、1995年にロシア語に対しても国家語の地位が与えられて以降、国内の公的領域では実質的にかなり広範囲でベラルーシ語の不使用が合法的に許されている状況にある。即ち、ベラルーシ政府は公式規範の国内への定着を推進する以前の段階であるベラルーシ語そのものの普及の段階で、国内において積極的な役割を果たせていない。一方で、ベラルーシ語による情報発信に熱心で、ベラルーシ語の普及を盛んに呼びかける作家をはじめとする知識人層、ジャーナリスト、一般市民ほど、タラシケヴィチ規範をより「真正な」ベラルーシ語の標準語規範と見なす傾向が強い点も重要である。こうした知識人層には、2009年から2017年までベラルーシ・ペンセンター (Беларускі ПЭН-Цэнтр)⁽¹²⁵⁾の会長を務めた作家のアンドレイ・ハダノヴィチ氏 (Андрэй Хадановіч)⁽¹²⁶⁾といったベラルーシ語使用者の間で影響力のある立場にある人物も多く含まれており、タラシケヴィチ規範がベラルーシ語使用者の間で一定のプレステージを獲得する背景要因となっている。

4. 2つの標準語規範をめぐる言語イデオロギーと現在の状況

4.1. ナーシャ・ニヴァ紙をめぐる1998年の訴訟⁽¹²⁷⁾

ここで2つの標準語規範をめぐる言語イデオロギーの実態について考察するために、2つのベラルーシ語規範をめぐる対立をとりわけ印象付ける事件である1998年のナーシャ・ニヴァ紙をめぐる訴訟について関連するメタ言語言説を検討していく。ナーシャ・ニヴァ紙は、20世紀初頭に出版されていた同名のベラルーシ語新聞の復刊として1991年より発行されるようになった独立系(非政府系)新聞であり、その創刊(復刊)当初より一つのポリシーとしてタラシケヴィチ規範に則ったベラルーシ語を使用していた。しかし、1998年5月、ナー

124 Curt Woolhiser “New Speakers of Belarusian: Metalinguistic Discourse, Social Identity, and Language Use,” in David M. Bethea and Christina Y. Bethin, eds. *American Contributions to the 15th International Congress of Slavists, Minsk, August 2013* (Bloomington, 2013), pp. 110-111.

125 ベラルーシ・ペンセンターは、1989年に組織され、1990年5月に国際ペンクラブ (PEN International) に加盟した (ベラルーシ・ペンセンター公式サイト [https://pen-centre.by/pen.html], 2021年6月1日閲覧)。

126 ハダノヴィチ氏のブログ [http://khdanovich.livejournal.com] (2021年6月1日閲覧) にてタラシケヴィチ規範の使用が確認できる。

127 本節の記述は特に明記しない限り *Клімаў*. Гісторыя складвання двух стандартаў (前注6参照). С. 45-46 に基づく。

シャ・ニヴァ紙は、国家出版委員会よりそのベラルーシ語使用が「言語使用上の一般に認められた規範を歪めること」を禁ずる出版法第6条に抵触するとして警告を受けたのである⁽¹²⁸⁾。国家出版委員会からの警告で具体的に指摘を受けたベラルーシ語使用は表3の通りである。なお、国家出版委員会から依頼を受けてナーシャ・ニヴァ紙のベラルーシ語を鑑定したのは、科学アカデミー言語学研究所のアルカージ・ジュラウスキーであった。

表3 国家出版委員会がナーシャ・ニヴァ紙に対して指摘したベラルーシ語使用⁽¹²⁹⁾

1) 同化による子音の軟音性が一貫して軟音記号によって示されている。 例：змест, сьвет, сьвята (公式規範：змест, свет, святa)
2) 外来語における硬子音がそれらの後ろに母音字 ъ や ы を綴ることによって示されている。 例：апазыцыя, бэнзын, газэта (公式規範：апазіцыя, бензін, газета)
3) 外来語における軟音の л が保持されている。 例：дыялёг, кляса, парлямэнт, філёлаг (公式規範：дыялог, класа, парламэнт, філолаг)
4) 接続詞 і が、母音で終わる語の後ろに続く際にйによって示されている。 例：ахвяры і каты, вольны і незалежны, доўга і шчасліва (公式規範：ахвяры і каты, вольны і незалежны, доўга і шчасліва)
5) 否定詞 не が、第一音節アクセントの単語の前に置かれる際に ня によって示されている。 例：ня ведаю, ня зможа, ня схільны (公式規範：не ведаю, не зможа, не схільны)
6) 語尾 -аў/-яў が無制限に使用されている。 例：асобаў, ахвяраў (公式規範：асоб, ахвяр)
7) 形容詞女性形の生格において語尾 -ае が広く使用されている。 例：беларускае мовы, вайсковае службы, нацыягальнае ідэі (公式規範：беларускай мовы, вайскавай службы, нацыягальнай ідэі)
8) 現代標準ベラルーシ語の辞書に定着していない単語が使用されている。
a) 標準語で対応する同根語と音声のあり方や語形成の方法が異なっている単語 例：апатэоз, даляр (公式規範：апафеоз, долар)
b) 標準ベラルーシ語で意味的対応のある特定の語が存在している非同根語の生成 例：асобнік, відзежа, гледзішча, улётка (公式規範：экземпляр, бачнасць, пункт погляду, лістоўка)

この表にまとめた国家出版委員会が不適切として指摘したナーシャ・ニヴァ紙におけるベラルーシ語使用の例は、公式規範の支持者とタラシケヴィチ規範の支持者の双方が考える「真

128 この問題について、ベラルーシ人民共和国ラーダは、6月10日付で「ナーシャ・ニヴァ紙に関するベラルーシ共和国政府の弾圧行為についての声明」を発表し国家出版委員会の警告に抗議した(Заява рады БНР // Наша Ніва №11 (108) 1998г.)。また、言論の自由の保護などに取り組む国際人権団体 ARTICLE 19 は、8月5日付で声明文「ベラルーシ：繰り返される出版メディアへの圧力はさらなる弾圧を証明している」を発表。国際人権規約第19条(ベラルーシは1998年9月に批准)への違反を指摘した(Суд над беларускай мовай // Наша Ніва №15 (112) 1998 г.)。

129 Папярэджанне аб парушэнні Закона Рэспублікі Беларусь «Аб друку і іншых сродках масавай інфармацыі» 29 мая 1998 г. №26 // Наша Ніва №11 (108) 1998 г.に基づく。なお、国家出版委員会の警告に実例として示されたタラシケヴィチ規範の使用例に対応する公式規範の例は筆者が補った。

正な」標準ベラルーシ語規範の具体的な姿を知る上で有力なメタ言語言説といえるだろう。標準語の形成は、一般的に規範的で社会的プレステージの高い標準語変種を確立しようとする中で、特定の言語的特徴を当該の標準語規範に取り込んでいくプロセスと並行して「望ましくない」ものとみなされる特定の言語的特徴をそこから排除しようとする言語純化主義的なプロセスを経ることが知られている⁽¹³⁰⁾。そうした言語純化主義の観点から言えば、この一覧は、第一にはこの言説の発信者である公式規範の支持者たちが、自らの考える「真正な」標準ベラルーシ語規範からいかなる要素を特に排除すべきと考えているかを示すものと解釈できる。また裏を返せば、これらはタラシケヴィチ規範の支持者たちにとってはむしろ「真正な」標準ベラルーシ語規範が必ず具えるべきと目されている言語的特徴の一覧であり、筆者が表中に補った対応する公式規範の言語的特徴の方は排除されるべき要素とみなされていると考えてよいだろう。

ナーシャ・ニヴァ紙編集部はその後、この警告の撤回を求めて国家出版委員会を高等経済裁判所に直ちに提訴し、1998年8月に初の口頭弁論が行われた。ナーシャ・ニヴァ紙側は、この件に関し改めて言語学者らに専門的な鑑定を依頼することを提案し裁判所はこれを認めた。これを受けて科学アカデミー言語学研究所の言語学者4名⁽¹³¹⁾からなる鑑定委員会が組織され、同年9月、この件をめぐる鑑定のための会合が行われた。鑑定委員会は「言語使用上の一般に認められた規範」という概念を、根拠づけを持って定義することは困難とし、さらに1933年までベラルーシにおいて使用された正書法の使用は「言語使用上の一般に認められた規範を歪めること」には当たらないという結論を出した。これを踏まえて、1998年12月、高等経済裁判所は国家出版委員会の警告が根拠のないものであるとし、それが無効であることを認め、ナーシャ・ニヴァ紙側の主張が支持される結果となった。

この訴訟は、公式には認められていないタラシケヴィチ規範がベラルーシ社会におけるその一定の存在意義を法廷という場で勝ち取ったという点で注目に値する事件であったが、合わせて注目されるのは、ナーシャ・ニヴァ紙と国家出版委員会の双方が自身の主張に賛同する国内のベラルーシ語専門家をそれぞれ味方につけたという点である。即ち、この訴訟は、ベラルーシ語使用者の知識人層の間に存在する言語規範をめぐる価値観の断絶を明るみに出したという点でも象徴的な事件であった。

4.2. 両規範の支持者が依拠する言語イデオロギー

ここで、ナーシャ・ニヴァ紙をめぐるこの訴訟に関連する新聞報道記事や同訴訟に関わった主要人物であるアルカージ・ジュラウスキーの著書を分析資料としてそれぞれの規範の支持者が展開しているメタ言語言説を分析し、タラシケヴィチ規範の支持者および公式規範の支持者が具体的にそれぞれどのような言語イデオロギーのもとにそれぞれの標準語規範を

130 Nirs Langer, Agnete Nesse, "Linguistic Purism," in Conde-Silvestre, Hernández Campoy, eds., *The handbook of historical sociolinguistics* (Malden, MA: John Wiley & Sons, 2012), p. 610.

131 ナーシャ・ニヴァ紙側が提案したパーヴェル・シチャツコ (Павел Уладзіміравіч Сцяцко), ヘナージ・ツィフン (Генадзь Апанасавіч Цыхун), ブラニスラウ・プロトニカウ (Браніслаў Аляксандравіч Плотнікаў), バヴェル・ミハイラウ (Павел Аляксандравіч Міхайлаў) の4名の言語学者が加わった。

正当化し、「真正な」ものとして支持してきたのかという点について考察していく。具体的には「公式規範」と「タラシケヴィチ規範」（いずれも正書法のみに着目しているものも含む）、そして2つの規範が生じる契機となった「1933年の正書法改革」の3つの項目について、両者（公式規範の支持者とタラシケヴィチ規範の支持者）がこれらを自覚的に主題として取り上げているメタ言語言説に注目し、これら3つにどのように言及しているかを考察する。分析資料としては、タラシケヴィチ規範の支持者のメタ言語言説が顕著に表れているナーシャ・ニヴァ紙における先の訴訟をめぐる報道記事（1998年の11号、15号、16号、18号）、および公式規範を支持し国家出版委員会の依頼でナーシャ・ニヴァ紙のベラルーシ語使用を批判的に鑑定したアルカージ・ジュラウスキー氏の著書『標準ベラルーシ語規範の諸問題』⁽¹³²⁾を対象として扱った。それぞれの資料にみられる主なメタ言語言説をまとめると表4、5のようになる。なお、それぞれのメタ言語言説が公式規範とタラシケヴィチ規範のいずれのベラルーシ語によって発信されているかという点も重要な文脈情報⁽¹³³⁾であると考えられることから、原文に続けてそれも併せて示す。

表4 タラシケヴィチ規範支持者のメタ言語言説 ※下線は筆者による

公式規範について
<p>1) 彼⁽¹³⁴⁾の考え方を辿るのは難しいことではない—この全てのナショナリスト、ベラルーシ国民戦線、ベラルーシ語協会、その他の民主主義者の作家たちにはベラルーシのために闘わせておけばいい、かつてベラルーシがその下で滅ぼされたソヴィエトのシンボルの下で。そして<u>クロパティ</u>⁽¹³⁵⁾における射殺者が用いた正書法で執筆活動をさせておけばいい。(Хаду ягонае думкі прасачыць няцяжка — няхай усё гэтыя нацыяналісты, БНФ, ТБМ і іншыя пісьменьнікі-дэмакраты змагаюцца за Беларусь пад савецкай сымболікай, пад якой Беларусь ужо аднойчы была зьнішчаная, няхай пішуць такім правапісам, якім пісаліся расстрэлы ў Курапатах., <u>タラシケヴィチ規範</u>)⁽¹³⁶⁾</p>

132 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照)。

133 木村は、「どのような言説をとりあげるにせよ、言語イデオロギーの考察において留意すべきことは、どのような人がどのような場でどのような話の流れで発言しているかという広い意味での文脈(コンテクスト)を捨象しないことである」としたうえで、「どのような言語(変種)でどのような発言が行われるか(あるいは行われないか)ということも文脈のひとつとして見逃せない」と指摘している(木村「言語復興における言語イデオロギーに注目する」(前注10参照)、87-88頁)。

134 ここでの「彼」はルカシェンコ大統領を指している。

135 クロパティはミンスクの外れに位置し、1988年に考古学者のジャン・パズニャク氏によって夥しい数の遺体の埋葬跡が発見された場所。遺体はスターリン体制期にソ連の秘密警察によって銃殺されたベラルーシ市民であるとされている(服部倫卓『不思議の国ベラルーシ』岩波書店、2004年、14-15頁)。

136 Мёртвы хапае жывога: Урад РБ аб’явіў новую вайну беларускай мове // Наша Ніва №11 (108) 1998 г.

2) なぜなら、広範に使用されている所謂ソヴィエト正書法（ナルカマウカ）においてですらも、様々な辞書や文法書で非常に重大な数々の逸脱が許容されているからだ。（Бо вядома, што нават у рамках шырока ўжыванага г. зв. савецкага правапісу — наркомаўкі — ў розных слоўніках і граматыках дапускаюцца вельмі істотныя адхіленьні ў адзін або другі бок., タラシケヴィチ規範)⁽¹³⁷⁾

タラシケヴィチ規範について

3) 実はナーシャ・ニヴァ紙はベラルーシ語の簡易化とロシア語への近接化についての人民委員会議の決定が採択された1933年にBSSRで禁止された非ソヴィエト正書法を使用している。（Рэч у тым, што «Наша Ніва» ўжывае несавецкі правапіс, які быў забаронены ў БССР у 1933 годзе, калі была прынятая пастанова народных камісараў аб спрашчэньні беларускай мовы і набліжэньні яе да мовы расейскай., タラシケヴィチ規範)⁽¹³⁸⁾

4) しかし実際には、非ソヴィエト正書法—そのために何百人もの我々の同胞が強制労働収容所で拷問を受けたそれは、正に国章パホーニャや白赤白国旗同様の民族の象徴になった。（Але ў тым і рэч, што несавецкі правапіс — той, за які многія сотні нашых землякоў былі замучаныя ў ГУЛАГу — стаўся такім самым нацыянальным сымбалам, як герб «Пагоня» і бел-чырвона-белы сьцяг., タラシケヴィチ規範)⁽¹³⁹⁾

5) ルカシェンコ大統領が禁止した白赤白の国旗とパホーニャの国章と共に正書法も自由なベラルーシの象徴、独裁体制に屈しない自由精神の印となった。（Разам з нацыянальным бел-чырвона-белым сьцягам і гербам Пагоня, якія прэзыдэнт Лукашэнка забараніў, правапіс стаўся сымбалам вольнае беларушчыны, знакам непадуладнага дыктатарскаму рэжыму духу свабоды., タラシケヴィチ規範)⁽¹⁴⁰⁾

6) В. タラシケヴィチの正書法—これは政権と民族のシンボルを失ったベラルーシ反体制派に唯一残されたものだ。（Правапіс Б.Тарашкевіча — гэта ўсё, што засталася ў беларускай апазыцыі пасля страты ўлады і нацыянальнай сымболікі., タラシケヴィチ規範)⁽¹⁴¹⁾

7) 学者⁽¹⁴²⁾の分析によれば、ナーシャ・ニヴァ紙で使用される言語形式は、「ベラルーシ語使用者の間に非識字を広め得るベラルーシ語の形式である」という。彼はまた、この形式の言語の使用を1941～1944年のドイツ占領下でファシストへの協力者が用いていた「道徳的・倫理的な観点から許容されない」ベラルーシ語の形式と考えている。（Паводле аналізу акадэміка, форма мовы, якую ўжывае «Наша Ніва», можа «садзейнічаць пашырэнню непісьменнасці ў асяроддзі карыстальнікаў беларускай мовы». Ён таксама лічыць выкарыстаньне гэтае формы мовы «недапушчальным з маральна-этычнага пункту погляду», намякаючы, што ёю карысталіся фашыстоўскія калябаранты падчас нямецкай акупацыі 1941-44 гг., タラシケヴィチ規範（ただし公式規範支持者の発言が引用されている部分は公式規範）⁽¹⁴³⁾

137 Мёртвы хапае жывога（前注137参照）。

138 Мёртвы хапае жывога（前注137参照）。

139 Мёртвы хапае жывога（前注137参照）。

140 Заява рады БН（前注128参照）。

141 Суд над беларускай мовай（前注128参照）。

142 この学者とは、ここでは名前こそ出てこないが、ナーシャ・ニヴァ紙の言語使用を分析した科学アカデミーの言語学者アルカージ・ジュラウスキー氏を指していることは明らかである。

143 Суд над беларускай мовай（前注128参照）。

8) 今日、ナーシャ・ニヴァ紙は 1933 年の改革によって歪められていないベラルーシ語正書法を保持しているベラルーシの領域における唯一の新聞である。(Сёння «Наша Ніва», — адзначаецца ў заяве, — адзіная на тэрыторыі Беларусі газета, якая захавала не скажоны рэформай 33-га году беларускі правапіс., たらシケヴィチ規範) ⁽¹⁴⁴⁾
1933 年の正書法改革について
9) 1933 年のボリシェヴィキの改革の後、前述した者たちとその他数十人の言語学者が全員射殺された。(Пасьля бальшавіцкай рэформы 1933 году ўсе згаданыя і дзясяткі іншых нашых мовазнаўцаў былі расстраляныя., たらシケヴィチ規範) ⁽¹⁴⁵⁾
10) 今日、20 世紀末という時に、ベラルーシ共和国政府はスターリンの全体主義による最も困難な時期の法令に違反したことでこの新聞を非難している。(Гэтак сёння, у канцы ХХ ст. улады РБ абвінавачваюць газету ў парушэньні законаў самых чорных часоў сталінскага таталітарызму., たらシケヴィチ規範) ⁽¹⁴⁶⁾
11) なぜなら、この法令は正書法の簡易化の為ではなくベラルーシ語の漸次的なベラルーシからの締め出しの為に考案された法令だからだ(そしてそれがついに実現した)。(Бо гэтыя законы прыдумляліся не для паляпшэньня правапісу, а для паступовага выгнаньня беларушчыны з грамадзкага ўжытку (што ўрэшце й адбылося)., たらシケヴィチ規範) ⁽¹⁴⁷⁾
12) こうして、正統ベラルーシ語正書法とルカシェンコの国家出版委員会が擁護する 1933 年のスターリンの法令の間の訴訟は、しばらくの間専門家の手にゆだねられる。(Такім чынам, цяжба паміж клясычным беларускім правапісам і сталінскім законам 33-га году, якога бароніць лукашэнкаў Дзяржкамдрук, на нейкі час пераходзіць у рукі спэцыялістаў., たらシケヴィチ規範) ⁽¹⁴⁸⁾

表 5 公式規範支持者のメタ言語言説 ※下線は筆者による

公式規範について
1) 新しい正書法はベラルーシ社会の幅広い層、特に作家たちの中で賛同をもって受け入れられたが、反響は専門の論集においても確認できる。(Новы правапіс быў прыхільна сустрэты шырокімі коламі беларускай грамадзкасці, у першую чаргу ў пісьменніцкім асяроддзі, што знайшло адпостраванне ў спецыяльным зборніку., 公式規範) ⁽¹⁴⁹⁾
2) それどころか近年の標準ベラルーシ語では、長年の使用実践を通じて定着してきたかつての言語規範の伝統が 60 年代後半～70 年代前半に見られた状態よりもさらに著しく乱れている。(Насуперак гэтаму ў беларускай літаратурнай мове за апошнія гады ранейшыя традыцыйныя нормы, замацаваныя шматгадовай практыкай, пачалі прыкметна парушацца, прычым у значна большай ступені, чым гэта назіралася ў канцы 60-х – пачатку 70-х гадоў., 公式規範) ⁽¹⁵⁰⁾

144 Заява рады БНР (前注 128 参照).

145 Мёртвы хапае жывога (前注 137 参照).

146 Суд над беларускай мовай (前注 128 参照).

147 Суд над беларускай мовай (前注 128 参照).

148 Над “Нашай Нівай” і беларускай мовай // Наша Ніва № 16 (113) 1998 г.

149 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注 3 参照). С. 7.

150 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注 3 参照). С. 26.

<p>タラシケヴィチ規範について</p> <p>3) それらの文書資料⁽¹⁵¹⁾はすべて、アルカイックな文法特徴と人工的な廃れた語彙を用いつつ正書法改革前の古い正書法で記されていた。これらの出版物の言語は、ベラルーシ住民にとって異質なものだった。(Усе такія матэрыялы друкаваліся па старому, дарэформеннаму правапісу з выкарыстаннем архаічных граматычных рыс і ўстарэлай штучнай лексікі. Мова гэтых выданняў аказалася чужой для беларускага насельніцтва., 公式規範)⁽¹⁵²⁾</p> <p>4) このことは、ベラルーシの出版社において、<u>正書法改革前の時期の正書法、形態、語彙に関する標準ベラルーシ語の規範</u>を復活させるために有利な背景となった。(Усё гэта стварыла спрыяльны фон для рэанімацыі ў беларускім друку арфаграфічных, марфалагічных і лексічных норм беларускай літаратурнай мовы дарэфармаменнага перыяду., 公式規範)⁽¹⁵³⁾</p> <p>5) 現代のベラルーシの多くの出版物の主な特徴は、<u>在外ベラルーシ人の出版物の言語規範</u>への志向である。(Галоўная асаблівасць многіх сучасных беларускіх выданняў – арыентацыя на нормы беларускага эмігранцкага друку., 公式規範)⁽¹⁵⁴⁾</p>
<p>1933年の正書法改革について</p> <p>6) その研究者⁽¹⁵⁵⁾は、正書法改革の主な規定を分析した結果、<u>1933年の正書法改革は国内で最良の言語学者勢の長年にわたる集中的な仕事の成果</u>であり、1930年代にベラルーシ語の統一された正書法が登場したことは重要で不可欠な施策であったという結論に達した。(Прааналізаваўшы асноўныя пункты гэтай рэформы, даследчыца цалкам абгрунтавана заключыла, што <u>правапісная рэформа 1933 г. – гэта вынік напружанай шматгадовай працы лепшых лінгвістычных сіл рэспублікі, што з’яўленне адзінага беларускага правапісу ў 30-я гады было важным і неабходным мерапрыемствам.</u>, 公式規範)⁽¹⁵⁶⁾</p>

最初に、タラシケヴィチ規範の支持者のメタ言語言説から検討していく。まず、タラシケヴィチ規範の支持者たちが批判の対象としている公式規範については「クロパティにおける射殺者が用いた正書法」(表4の1))や「ソヴィエト正書法」(表4の2)、4))といった表現を用いて言及している点が注目される。これは、公式規範の基礎となった1933年の正書法改革についての言及である、「1933年のポリシェヴィキの改革」(表4の9))や「スターリンの全体主義による最も困難な時期の法令」(表4の10))、「ルカシェンコの国家出版委員会が擁護する1933年のスターリンの法令」(表4の12))、「この法令は正書法の簡易化の為ではなくベラルーシ語の漸次的なベラルーシからの締め出しの為に考案された法令」(表4の11))とも通じるメタ言語言説としてみなしうるだろう。タラシケヴィチ規範の支持者たちは、公式規範と1933年の正書法改革の両方について、ソヴィエト時代、特に多くの文化人や知識人が粛清されベラルーシ語・ベラルーシ文化の発展が抑圧されたスターリン体制期

151 ナチス・ドイツ占領期にベラルーシで出版されたベラルーシ語出版物を指す。

152 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照). С. 10.

153 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照). С. 21.

154 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照). С. 26.

155 この研究者とは、この引用箇所で言及されている以下の新聞記事の著者である L. シャメシュカ氏を指す。言及されている記事：*Сямешка, Л. Навошта блытаць чалавека з пашпартам? // Настаўніцкая газета. 1989. 10, 14, 17 чэрвеня.*

156 Жураўскі. Праблемы норм беларускай (前注3参照). С. 21.

という特定の社会的・歴史的背景との結びつきを強調することで、そのシンボリックな正当性を貶めようとしていることがわかる。また、公式規範は実際には1933年以前から続くベラルーシ語の標準語化プロセスの延長線上に形成されてきたものであるにも関わらず、その点には触れずに殊更に1933年の正書法改革との繋がりを強調することもまた、公式規範の正当性をシンボリックな側面から否定的に描き出そうとしている点が注目される。

彼らが支持するタラシケヴィチ規範そのものについては、「国章パホーニャや白赤白国旗同様の民族の象徴」（表4の4）、「自由なベラルーシの象徴」（表4の5）、「独裁体制に屈しない自由精神の印」（表4の5）、「政権と民族のシンボルを失ったベラルーシ反体制派に唯一残されたもの」（表4の6）といったように、この規範自体を独立したベラルーシ民族のアイデンティティのシンボルとして強調する言説が繰り返されている点が特に注目される。さらに「非ソヴィエト正書法」（表4の3と4）、「33年の改革によって歪められていないベラルーシ語正書法」（表4の8）といった言及からは、タラシケヴィチ規範をネガティブな社会的・歴史的背景であるソヴィエト時代や1933年の正書法改革とは断絶した存在として強調することで、「真正な」標準語規範としてのシンボリックな正当性をアピールしようとしている点がうかがえる。

ここで興味深いのは、「タラシケヴィチ規範の方がコミュニケーションの円滑化により貢献する」といったコミュニケーション上の機能の優位性を主張するような言説は見られない点であろう⁽¹⁵⁷⁾。一般的に、特定の言語の標準語というものは、地域を超えた（方言的差異を超えた）円滑なコミュニケーションを可能にする機能と共同体のシンボルとしてその共同体の構成員の団結を促す機能の2つをもち合わせているということが指摘されている⁽¹⁵⁸⁾。しかし、タラシケヴィチ規範の支持者たちが展開するメタ言語言説は、明らかに後者の「共同体のシンボル」としての機能に関わる内容に議論が集中しており、彼らにとっての「真正な」標準ベラルーシ語規範という言語イデオロギーの根幹をなすのは、「共同体のシンボル」としての正当性や意義といった価値観であることがわかる。これは、例えば表4の7)にみられるように、敵対する公式規範の支持者たちの主張を取り上げる際にも、特に「共同体のシンボル」としての正当性や意義に光を当てた言説に注目しているというところからも明らかであろう。タラシケヴィチ規範の支持者たちは、こうした「共同体のシンボル」としての正当性や意義という観点からタラシケヴィチ規範の「真正さ」を強調することは勿論、あわせて公式規範についてはそのシンボルとしての正当性を繰り返し否定することで、支持するタラシケヴィチ規範の「真正さ」をより際立たせようとする言語イデオロギーをもっていると言指できる。

続いて公式規範の支持者によるメタ言語言説を検討していく。まず、彼らが批判するタラシケヴィチ規範についてだが、「アルカイックな文法特徴と人工的な廃れた語彙を用いつつ正書法改革前の古い正書法で記されていた」「ベラルーシ住民にとって異質なもの」（表5の3))のように、タラシケヴィチ規範がベラルーシ国内のベラルーシ人にとって人為的で不自然

157 この点に関しては、現代ベラルーシでは、こうした地域間の方言差を超えたコミュニケーションの円滑化という機能を担っているのが実質的にロシア語であるという事情もあるだろう。

158 Langer, Nesse, "Linguistic Purism," (前注130参照) p. 610.

然なものであるという点を強調する言説が繰り返されている点が注目される。タラシケヴィチ規範を「在外ベラルーシ人の出版物の言語規範」(表5の5))とする言及も併せて考えるならば、公式規範の支持者はタラシケヴィチ規範をベラルーシ本国のベラルーシ人にとって異質で外部的なものとして描こうとするメタ言語言説を展開する点が特徴的であると指摘できる。すなわち公式規範の支持者は、標準ベラルーシ語規範の「真正さ」を考える上でベラルーシ国内のベラルーシ人にとっての「真正さ」を第一に重視するという言語イデオロギーをもっていると考えられる。

公式規範についても「新しい正書法はベラルーシ社会の幅広い層、特に作家たちの中で賛同をもって受け入れられた」(表5の1))、「長年の使用実践を通じて定着してきたかつての言語規範の伝統」(表5の2))といった言及がみられるが、これは公式規範が(ソヴィエト・ベラルーシの)作家をはじめとする社会の広い層に受け入れられたこと、およびそれがソ連時代に実際のベラルーシ語の使用実践を通じて(ソヴィエト・ベラルーシの)社会に定着してきたということを強調する言説であるといえるだろう。また、1933年の正書法改革についての言及「1933年の正書法改革は国内で最良の言語学者勢の長年にわたる集中的な仕事の成果」(表5の6))も同様で、(ソヴィエト・ベラルーシの中で)それが確かに評価されるべき内容のものであったということが特に強調されている。こうした公式規範と1933年の正書法改革にかんするメタ言語言説が、実際にはそれがソヴィエト・ベラルーシの国内に限定した出来事であったにも拘わらず、その点を明言しない点は、公式規範の支持者が標準ベラルーシ語規範の「真正さ」を考える上で、やはりベラルーシ国内のベラルーシ人にとっての「真正さ」を殊更に重視するという言語イデオロギーをもっていることの証左であるといえるだろう。

この他、タラシケヴィチ規範の支持者によるメタ言語言説の中において引用された形ではあるが、公式規範の支持者の主張として、タラシケヴィチ規範は「1941～1944年のドイツ占領下でファシストへの協力者が用いていた道徳的・倫理的な観点から許容されない」ベラルーシ語の形式」(表4の7))であるという言及もみられる。これは、公式規範の支持者もまた、タラシケヴィチ規範の「真正さ」を「共同体のシンボル」としての不適格さという側面から否定しようとする言語イデオロギーをもつことを示しているといえるだろう。

また、タラシケヴィチ規範の支持者のメタ言語言説では言及の無かったコミュニケーション上の機能という観点からみると、公式規範の支持者のメタ言語言説にはタラシケヴィチ規範について「ベラルーシ住民にとって異質なもの」(表5の3))という言及がみられる点が注目される。これは、公式規範の支持者がタラシケヴィチ規範の使用をベラルーシ人同士のコミュニケーションの円滑化を妨げるものとして強調しようとする言語イデオロギーのあらわれとみなすことができるだろう。ただし、こうしたコミュニケーション上の機能に関するメタ言語言説は全体としては多く見られず、これが公式規範の支持者にとっても標準語規範の「真正さ」にとってはあまり重要視されていない観点であることがわかる。

なお、表4と表5にまとめたタラシケヴィチ規範の支持者と公式規範の支持者のメタ言語言説に共通しているのが、両者ともに、メタ言語言説の発信においてはそれぞれの支持する標準語規範を用いており、言及・言明の内容とその発信の形式が共鳴するかたちになってい

ることである。興味深いのは、タラシケヴィチ規範の支持者が公式規範の支持者の言説を引用した表4の7)の例で、ここではタラシケヴィチ規範の支持者の言明の地の文の部分はタラシケヴィチ規範が用いられているのに対し、公式規範の支持者の発言とされる引用部分はわざわざ公式規範で表されている。これは、タラシケヴィチ規範の支持者による公式規範支持者の主張内容への批判的評価を、表現形式の側面からも強調しよりシンボリックな形で見せるという効果を発揮しているといえるだろう。

おわりに

本論文で検討してきた現代ベラルーシ語の事例のように、実質的に1つの言語とみなしうる言語の標準語規範が何らかの事情により分裂傾向ないし極性を持ち、そうした極性を伴う規範が別々の言語規範変種（あるいは別々の個別言語）として人々に認知されているというのは世界の言語にしばしば見られる現象である。ハインツ・クロスは、極めて近親性の高い複数の話し言葉が、話者集団の政治的ないし地理的な分断などを背景に標準語化のプロセスの中で十分に差異を統一できず、実質的な言語の実態としては1つでありながらも標準語規範というレベルでは極性を保持している、そうした言語を多極性言語（Polycentric standard language）と定義した¹⁵⁹。クロスはその典型例として、セルビア語とクロアチア語¹⁶⁰、モルドバ語とルーマニア語、ペルシャ語とタジク語、イギリス英語とアメリカ英語、イベリアポルトガル語とブラジルポルトガル語などをあげている¹⁶¹。標準語規範の分裂が生じている現代ベラルーシ語もまたこうした多極性言語に類する事例の1つとしてみるのが可能だろう。

ただし、多極性言語としてクロスがあげたこれらの言語はより詳しく検討すると、極性を有する言語規範同士が最終的にその極性をさらに発展させて別々の個別言語として認知されることで一種の住み分けによる共存関係を達成している言語（例えば、セルビア語／クロアチア語、モルドバ語／ルーマニア語、ペルシャ語／タジク語）と、地理的に隔たった言語集団内で使用されていることで同じ言語の別の標準語変種という形で相互に独立し共存関係を実現している言語（例えば、イギリス英語／アメリカ英語、イベリアポルトガル語／ブラジ

159 Kloss, “‘Abstand Languages’and ‘Ausbau Languages’,” (前注12参照) pp. 31-32. Polycentric standard language は、現在では Pluricentric Language (複数中心地言語) という呼び方も広く一般化している (例えば、Michael G. Clyne, ed., *Pluricentric Languages: Differing Norms in Different Nations* (Berlin : Mouton de Gruyter, 1991) など)。

160 クロス自身はセルボ・クロアチア語 (Serbo-Croatian) という呼称を用いているが、現代においてはそれぞれセルビア語とクロアチア語というように個別の言語として呼び分けることが一般化している。セルビア語とクロアチア語をめぐる標準語化と多極性言語の問題については三谷恵子「現在のクロアチア語について」『スラヴ研究』40号、1993年、75-96頁が詳しい。

161 Kloss, “‘Abstand Languages’and ‘Ausbau Languages’,” (前注12参照) p. 31. クロスは一方で、近親性の高い複数の話し言葉が統一された1つの標準語の規範を獲得した言語を造成言語 (Ausbau language) と定義し、チェコ語とスロヴァキア語、デンマーク語とスウェーデン語、ブルガリア語とマケドニア語などをその典型例としてあげている (Kloss, “‘Abstand Languages’and ‘Ausbau Languages’,” pp. 29-33)。ベラルーシ語の場合も、標準語化が本格化する以前はポーランド語の方言ないしロシア語の方言とみなされていたことから、ポーランド語とロシア語との関係に着目すれば造成言語としての側面をもつともいえるだろう。

ルポルトガル語)の2つにタイプ分けが可能である。この点に着目した場合、現代ベラルーシ語は、標準語規範が2つに分裂しそれぞれに発展を遂げていった1933年以降からペレストロイカ期までの期間に限ってみれば、ソヴィエト・ベラルーシとその域外(西ベラルーシや欧米の在外ベラルーシ人コミュニティ)という住み分けをある意味実現していたことから後者のタイプの多極性言語に近い状態にあったといえるだろう。

しかし、2つの規範がベラルーシという一国の中で競合するようになった、ペレストロイカ期以降の標準ベラルーシ語をめぐる状況は、先に挙げた2つのタイプの多極性言語の枠組みでは論じきれない問題を内包しているといえる。現代ベラルーシ語の事例は、分裂している2つの規範が一定の共存関係に向かっているというよりはむしろ、「真正な」ベラルーシ語という1つの座をめぐる相互排他的な関係を成しているという点が特徴的であり、これは多極性言語の中では先の2タイプとは別タイプのものとして捉えられるであろう。現代ベラルーシ語における公式規範とタラシケヴィチ規範の対立関係は、4.2.で検討した両者の言語イデオロギーの特徴にも明らかなように、それぞれの規範の支持者たちがもう一方の標準語規範の「真正さ」を貶めようとする言説を繰り返し展開することで自身の支持する標準語規範の正当性を示そうとする、敵対意識の極めて強い対立関係に陥っているという点が大きな特徴である。

多極性言語の例としてのベラルーシ語の状況と恐らく最も近いのは、ニューノシュク(Nynorsk)とブークモール(Bokmål)という2つの標準語規範の対立が見られるノルウェー語であろう¹⁶²⁾。14世紀末から約400年にわたりデンマークの支配下にあったノルウェーでは社会の中で長らく書き言葉としては専らデンマーク語が用いられ、ノルウェー語は口語の領域に限られて用いられる状況にあった。ノルウェー語はこうした中、19世紀に入ってノルウェーがデンマークから独立を果たしたのを機に標準語として発展してきた経緯をもち、その過程でブークモールとニューノシュクという2つの標準語規範が生まれた。ブークモールは、それまでノルウェー社会で書き言葉として機能してきたデンマーク語を基礎にノルウェー語的な正字法、発音、イントネーションを加えて成立した規範であるのに対し、ニューノシュクは元来のノルウェー方言を基盤として、いわば「本来の」標準ノルウェー語を目指して作り出された規範である。ノルウェー語の2つの標準語規範は、20世紀に入って何度か統合が試みられてきたものの成功にはいたっておらず、両者はそれぞれに支持者を獲得して対立関係を成している。現代ベラルーシ語の標準語をめぐる公式規範とタラシケヴィチ規範の対立と競合は、標準ノルウェー語の事例と同じく2つの標準語規範が対立して相互排他的な関係に陥っている事例である。

だが、両事例には決定的に異なる点も存在する。それは、両事例において対立関係にある2つの規範がノルウェー国内あるいはベラルーシ国内でそれぞれ受けている政治的扱いである。現在、ノルウェーにおいては、ブークモールとニューノシュクの両規範は法的に同等に扱われており、国内の言語政策に関してもブークモール支持派とニューノシュク支持派を

162 以下、標準ノルウェー語に関する記述は特に明示しない限り、山本文明「ノルウェー語」『言語学大辞典：第3巻(世界言語編)』三省堂、1992年、48-55頁及び、森信嘉「ノルウェーにおける言語状況と言語政策・言語教育政策」『拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究報告書』東京外国語大学、2009年、1-26頁に基づく。

同数ずつ含めた言語諮問委員会が設置され、それぞれの陣営が同等の権利を持って政策議論を行なっている。これに対してベラルーシの場合は、3.4. に検討してきたように、政府は対立する2つの規範のうち公式規範のみを合法的な標準ベラルーシ語規範とし、タラシケヴィチ規範は非合法のものとして事実上使用を禁止しているという状況にある。すなわち、ノルウェー語とベラルーシ語の事例は分裂を生じている標準語規範の統合が達成されておらず一国内で競合・対立する関係にあるという点は同じであるものの、ノルウェーの場合は両規範の支持者間の対立緩和に向けた政治的な措置が講じられているのに対し、ベラルーシの場合は政府が一方の規範のみを公認することでかえって両規範の支持者間の溝が一層深まっているといえる。

現在、タラシケヴィチ規範はベラルーシ国内では公な使用は認められていないものの、ベラルーシの言語状況、特にベラルーシ語使用者をめぐる状況において無視し難い影響力を持っており、今後もその動向が注目される。先に検討したように、現在のベラルーシ政府はタラシケヴィチ規範の使用を非合法化するという形で強制的に標準ベラルーシ語規範の統一を図っているが、ベラルーシ語そのものの話者の減少も問題視されている中でこうした政策が国民統合やベラルーシ語の保持という観点からみて効果的なものであるかは疑問である。論文の冒頭でも言及したように、現在のベラルーシでは長年強権的な政治体制をしいてきたルカシェンコ政権に対する抗議活動の中で白赤白の国旗や国章パホーニャがかつてない規模で急速に人々の間で支持され、団結のシンボルとして機能するようになった。ベラルーシ語をシンボルとして掲げる動きはまだ顕著ではないものの、今後新しい政治体制が樹立されることになれば、いずれ時間差で人々の関心がベラルーシ語の普及や今回扱った標準ベラルーシ語規範の分裂の問題に再度集まる可能性は大きい。そのときに、ベラルーシ語使用者自身が意識的に個々の支持する標準語規範の違いを超えてベラルーシ語の復興や普及に向けて協力関係を築いていけるかどうか、そうした新たな言語イデオロギーを創出していくことができるのかという点は今後大いに注目される点である。

付記：本論文は JSPS 科研費〔特別研究員奨励費、研究課題名：ベラルーシ及びウクライナにおける民族語の威信形成に関する比較研究、課題番号：18J00650〕の助成を受けた研究成果の一部である。

Divergence and Conflict between the Two Norms of the Modern Belarusian Literary Language

KIYOSAWA Shiori

The problem of divergence and conflicts between literary norms is considered a particularly significant problem that arose during the formation of the modern Belarusian literary language. Practically, there are two types of literary Belarusian used in today's Belarusian society. One is the official literary norm formed during the Soviet era (after 1933, to be precise) and used for many years in administration, education, and publication inside Belarus. The other is the literary norm *Taraškievica*, which was supported by some Belarusians, including intellectuals, from the Perestroika period. *Taraškievica* is a literary norm of modern Belarusian that was originally popularized in the 1920s and is named for the linguist Branislaŭ Taraškievič, the author of "Belarusian Grammar for Schools" (Vilnius, 1918), which was the foundation for the norm. These two literary norms are currently at odds in Belarusian society over which is the "authentic" Belarusian literary language. This article explores how divergence and conflicts between two Belarusian literary norms have emerged and how the two linguistic norms are regarded as "authentic" by their supporters. First, I overview the history of modern literary Belarusian from the perspective of corpus planning in language policy. Second, I analyze linguistic ideologies among the proponents of official norms and *Taraškievica* by focusing on the meta-linguistic discourse of the supporters of two standard language norms.

Although Belarusian was exclusively used as a spoken language by peasants or poor szlachtas at the end of the eighteenth century, it began to be used for literary works starting in the nineteenth century. At the same time, linguistic research on the Belarusian language (to be precise, Belarusian dialects of Russian) was also promoted in the Russian Empire. In 1905 the tsarist government for the first time officially permitted publishing activity in Belarusian. After the collapse of the tsarist regime, with "Belarusian Grammar for Schools" published by B. Taraškievič in 1918, the orthographic and grammatical norms presented in this book were widely endorsed by the Belarusian intellectuals of that time and quickly brought into everyday linguistic practice.

After the establishment of the Byelorussian Soviet Socialist Republic (BSSR) in 1919, it was the Soviet government, rather than individuals such as writers, linguists, and social activists, that guided the formation of the Belarusian literary language. Within the BSSR, the Institute of Belarusian Culture (later the Belarusian Academy of Sciences) played a leading role in the compilation of scientific terminology and Belarusian dictionaries, development of orthography, and other projects. When the Stalinist regime began in the 1930s, however, the linguists of the Academy of Sciences, who had led the standardization of Belarusian, were successively purged. In 1933, the BSSR's Council of People's Commissars implemented the orthographic reform that rendered the Belarusian orthographic norms, and some grammatical norms, closer to the Russian literary language. While the official orthography based on this reform was adopted in Soviet Belarus in 1934, the reform was accepted neither by the Belarusians in Western Belarus (then under the rule of Poland) nor by Belarusian communities abroad. They continued to use the pre-reform

literary norm, i.e., *Taraškievica*.

In the Perestroika period, with political and social liberalization in Soviet Belarus, the use of the Belarusian language based on *Taraškievica* gradually began to flow into the country from the expatriate Belarusian community. It rapidly gained popularity among the intellectuals as a more “authentic” Belarusian literary norm. Nowadays, while official literary norms of Belarusian are used in the field of administration, education, and mass media, *Taraškievica* is also widely used in the more personal sphere of language use, such as blogs and social networking sites. Analysis of the meta-linguistic discourse among the proponents of each norm shows that the proponents of *Taraškievica* have a linguistic ideology emphasizing the “authenticity” of *Taraškievica* in terms of its legitimacy and significance as a “symbol of the community.” Simultaneously, they try to highlight the authenticity of *Taraškievica* by repeatedly denying the legitimacy of the official norm as a national symbol. Supporters of the official norm, meanwhile, embrace a linguistic ideology placing a particular emphasis on authenticity for Belarusians within Belarus. In proving the “authenticity” of the Belarusian literary language, they are inclined to argue that the legitimacy of the official norm has persistently thrived within Belarus, denouncing *Taraškievica* as having developed outside Belarus.